

西牟田大立遺跡
西牟田北原遺跡
西牟田平野遺跡 (2次調査)

福岡県久留米市三潞町西牟田所在遺跡の調査

2006

福岡県教育委員会

西牟田大立遺跡
西牟田北原遺跡
西牟田平野遺跡 (2次調査)

福岡県久留米市三潞町西牟田所在遺跡の調査



1. 西牟田大立・北原遺跡遺景（南西上空から）



1. 西牟田北原遺跡出土 駅茶瓶

序

ここに報告する西牟田大立遺跡・西牟田北原遺跡・西牟田平野遺跡（2次調査）は、九州新幹線建設に伴って発掘調査された遺跡です。

これらの遺跡の調査では、縄文時代に推定される落し穴や古墳時代の用水路、江戸時代から明治時代の井戸群など、久留米市三潴町西牟田地区に暮らした先人の低地開発の歴史を知る上での貴重な資料を得ることができました。

発掘調査・報告書作成においては、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、三潴町教育委員会(現久留米市教育委員会)、久留米市教育委員会の諸機関をはじめとして、地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

また、本書が教育・研究、文化財愛護思想の普及に寄与できれば幸いです。

平成18年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 山 良 一

例言

1. 本書は九州新幹線建設に伴って発掘調査を実施した、久留米市三瀬町大字西牟田に所在する西牟田大立遺跡・西牟田北原遺跡・西牟田平野遺跡（2次調査）の報告書である。
2. 発掘調査・報告書作成は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構の委託を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
3. 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館で行い、金属器は、九州歴史資料館において、同館学芸第二課加藤和歳の指導の下で整理を行った。
4. 掲載した図は、遺構を秦・今井・小澤が、遺物を秦・今井の他、平田春美・中村洋子・西原節子が作成したものを豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が製図したものである。
5. 掲載した写真は、遺構を秦・今井が、遺物は九州歴史資料館において同館参事補佐石丸洋の指導の下、文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影したものを使用した。
なお、空中写真は西牟田大立遺跡を東亜航空技研株式会社、西牟田北原遺跡・西牟田平野遺跡（2次調査）を九州航空株式会社に委託した。
6. 使用した方位はすべて座標北である。
7. 本書のⅠ・Ⅱ・Ⅲ-1・2は秦、Ⅲ-3は今井が執筆し、秦が編集した。

本文目次

Ⅰ. はじめに	1
Ⅱ. 位置と環境	3
Ⅲ. 調査の内容	8
1. 西牟田大立遺跡	8
2. 西牟田北原遺跡	17
3. 西牟田平野遺跡（2次調査）	35

図版目次

巻頭図版 1. 西牟田大立・北原遺跡遠景（南西上空から） 2. 西牟田北原遺跡出土駅茶瓶

西牟田大立遺跡

- 図版 1 1. 西牟田大立遺跡Ⅰ区全景（東から） 2. 同上 1号溝（西から）
3. 同左（北から）
- 図版 2 1. 西牟田大立遺跡Ⅰ区風倒木（東から） 2. 同上 噴砂土層断面（南から）
3. 同上 地割れ跡（南から）
- 図版 3 1. 西牟田大立遺跡Ⅱ・Ⅲ区全景（南上空から） 2. 同上（上空から）
3. 西牟田大立遺跡Ⅱ区全景（上空から） 4. 同上 Ⅲ区全景（上空から）
- 図版 4 1. 1号土坑（南から） 2. 同上 土層断面（南から）
3. 2号土坑（西から） 4. 3号土坑（西から）
5. 同上 土層断面（西から）
- 図版 5 1. 4a・4b号土坑（南東から） 2. 同上 土層断面（南東から）
3. 1号井戸（東から） 4. 1号井戸土層断面（東から）
- 図版 6 1. Ⅱ区1～4号溝（上空から） 2. Ⅱ区1号溝土層断面（北西から）
3. Ⅱ区2～4号溝土層断面（北西から） 4. 西牟田大立遺跡出土遺物

西牟田北原遺跡

- 図版 7 1. 西牟田北原遺跡全景（北上空から） 2. 同上（上空から）
3. 同上 Ⅰ・Ⅱ区全景（上空から）
- 図版 8 1. 1号土坑（南西から） 2. 2号土坑（北西から）
3. 1号落し穴（東から） 4. 2号落し穴（西から）
- 図版 9 1. 西牟田北原遺跡Ⅰ区1号井戸（東から） 2. 同上 2号井戸（東から）
3. 西牟田北原遺跡Ⅱ区1号井戸（北から） 4. 同上 遺物出土状態（北から）
- 図版10 1. 1号溝（北西から） 2. 同上 土層断面（北西から）
3. 2号溝土層断面（南から） 4. 4号溝土層断面（西から）
5. 風倒木痕土層断面（南東から）
- 図版11 1. 西牟田北原遺跡1号井戸出土遺物 2. 同上 2号井戸出土遺物
3. 同上 3号井戸出土遺物
- 図版12 西牟田北原遺跡3号井戸出土遺物

西牟田平野遺跡（2次調査）

- 図版13 1. 西牟田平野遺跡（2次調査）調査区全景（南から） 2. 1号土坑（東から）
3. 3号溝状遺構土層（西から）
- 図版14 1. 西牟田平野遺跡（2次調査）溝状遺構出土遺物 2. 同上 支線遺構出土土器・石器
3. 同上 その他の出土遺物

挿図目次

第1図	西牟田大立遺跡・西牟田北原遺跡・西牟田平野遺跡（2次調査）位置図（1/4,000）	1
第2図	西牟田大立遺跡・西牟田北原遺跡・西牟田平野遺跡（2次調査）周辺遺跡分布図（1/50,000）	4
第3図	西牟田大立遺跡遺構略配置図（1/4,000）	8
第4図	西牟田大立遺跡Ⅰ区遺構配置図（1/200）	9
第5図	西牟田大立遺跡Ⅱ区遺構配置図（1/300）	10
第6図	西牟田大立遺跡Ⅲ区遺構配置図（1/300）	11
第7図	土坑実測図（1/60）	12
第8図	1号井戸実測図（1/60）、1～4号溝状遺構土層断面図（1/40）	13
第9図	西牟田大立遺跡出土遺物実測図（1/3）	15
第10図	西牟田北原遺跡周辺地形図（1/2,000）	17
第11図	西牟田北原遺跡Ⅰ・Ⅱ区遺構全体図（1/600）	18
第12図	西牟田北原遺跡Ⅲ区遺構全体図（1/600）	18
第13図	土坑・井戸実測図（1/40）	19
第14図	1号井戸出土遺物実測図（1/3）	21
第15図	2号井戸出土遺物実測図（1/3）	22
第16図	3号井戸出土遺物実測図1（1/3）	24
第17図	3号井戸出土遺物実測図2（1/3）	25
第18図	落し穴実測図（1/20）	26
第19図	1・2・4号溝状遺構、風倒木痕土層実測図（1/40）	27
第20図	久留米市西南部・筑後市・八女市域の落し穴、縄文早期遺跡分布図（1/100,000）	29
第21図	駅茶瓶の構造と使用（販売）形態	30
第22図	明治36年の九州鉄道路線	31
第23図	西牟田北原遺跡旧地形復原図（1/2,000）	32
第24図	西牟田平野遺跡（2次調査）周辺地形図（1/3,000）	35
第25図	西牟田平野遺跡（2次調査）遺構配置図（1/200）	36
第26図	1号土坑実測図（1/30）	37
第27図	出土土器・石器実測図（10は1/2、その他は1/3）	37
第28図	調査区東壁土層図（1/40）	38

I. はじめに

1. 調査の経緯

ここに報告する遺跡は、九州新幹線建設工事に伴い発掘調査されたものである。九州新幹線は博多から久留米市、八代を経由して鹿児島に至る総延長257kmの路線である。このうち、新八代～西鹿児島にいたる区間は平成16(2004)年3月31日に部分開業しており、早急な全線開業が望まれている。

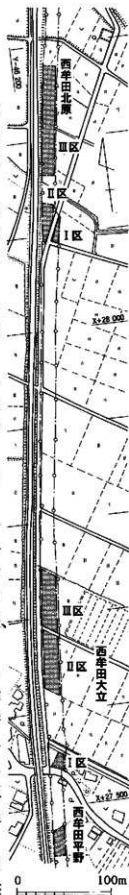
九州新幹線全区間のうち博多～船小屋間については、平成12(2000)年12月18日の政府与党合意により、新規着工区間として示され、平成13(2001)年4月25日に工事実施追加計画が認可され、同年6月2日に建設工事が起工された。

博多～船小屋間のうち久留米市南部(旧三瀬町内)～筑後市北東部にあたる西牟田工区については、平成15(2003)年6月2日付で、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局(現独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部九州新幹線建設局)から福岡県教育庁文化財保護課に対し、この区間に係る埋蔵文化財の有無確認の依頼があった。これを受けて同課が大立・北原地区については平成15年6月9～12日に試掘調査を実施した。その結果、すでに削平された部分もあったが、溝や土坑などが確認されたため、本調査が必要となり、平成15年7月10日～9月30日に西牟田大立遺跡として本調査を実施した。

北原地区の一部は用地取得の遅れから、平成15年8月5日に西牟田6285-5・6271-6・6285-6b番地、9月30日に西牟田6267-4・6269-4・6270-5・6299-26番地に試掘調査を実施し、北原地区北側の久留米市との旧市町境まではすでに削平されており遺構が見られなかったが、それ以北は溝やピットが検出されたため本調査が必要になった。西牟田大立遺跡の調査終了後、平成15年10月1日～30日に西牟田北原遺跡として本調査を実施した。

平野地区については、平野6153-3、6154-5、6155、6162-2、6157-6、6164-3・5番地の試掘調査を平成15年12月8・9日に実施し、谷地形で遺構・遺物は確認されなかった。6168-2、6337-5、6336-1・49、6337-6番地は平成16年7月2日に試掘調査を実施し、6168-2番地で溝などが見られ本調査が必要となり、西牟田平野遺跡2次調査として平成16年10月12日～11月12日に本調査を実施した。なお、用地引渡しの遅れた大立地区と平野地区の間の6169-1・2、6170-1011番地は平成17年4月6日に久留米市教育委員会が試掘調査を実施した結果、遺構が確認されなかった。

この結果、旧三瀬町内は本書に掲載する3遺跡のみの本調査となった。また、調査成果については平成17年度に報告書作成業務を行うことで協議が整った。



第1図 西牟田大立遺跡・西牟田北原遺跡・西牟田平野遺跡(2次調査)位置図(1/4,000)

2. 調査の組織

遺跡の発掘調査・整理報告にかかわる平成15～17年度の関係者は次のとおりである。

日本鉄道建設公団 九州新幹線建設局

(平成15年10月1日から独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部九州新幹線建設局)

	平成15年度	平成16年度	平成17年度
局長	高山 博文	高山 博文(～H16.11) 北川 隆(H16.12～)	北川 隆
次長	伊神 英二	伊神 英二	関根 茂
川地第一課長	川原 久敏	田中 等	田中 等
同課長補佐	有屋川 幸郎(～H15.7) 木左一 正和(H15.8～)	木左一 正和	木左一 正和
同担当係長	入江 万久	入江 万久	入江 万久
工事第二課長	平田 稔	石徳 博行	石徳 博行
同課長補佐	百田 實	石徳 博行 中山 雄二	中山 雄二
同係長	構 義弘	溝 義弘 古田 裕志	古田 裕志
福岡県教育委員会	平成15年度	平成16年度	平成17年度
総括			
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	一瀬 寧夫	清水 圭輔	清水 圭輔
総務部長	清水 圭輔	中原 一憲	中原 一憲
文化財保護課長	井上 裕弘	井上 裕弘	久芳 昭文
同副課長			川述 昭人
同参事	川述 昭人(兼課長技術補佐) 木下 修(兼課長技術補佐)	川述 昭人(兼課長技術補佐) 木下 修(兼課長技術補佐)	木下 修(兼課長技術補佐)
同課長補佐		安川 正郷	安川 正郷
同参事補佐	中間研志(調査第二係長)	中間研志(調査第二係長)	飛野博文(調査第二係長)
庶務			
文化財保護課管理係長	古賀 敏生	稲尾 茂	稲尾 茂
同事務主査	宮崎 志行	宮崎 志行	石橋 信二
同主任主事	秦 俊二 木竹 元	石橋 信二 末竹 元	末竹 元 澗上 大輔
調査・報告書作成			
主任技師	秦 憲二	秦 憲二 今井 涼子	秦 憲二 今井 涼子

なお、発掘調査から報告書刊行にいたる間には、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局(現独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部九州新幹線建設局)・同久留米鉄道建設所・三浦町教育委員会(現久留米市教育委員会)・久留米市教育委員会をはじめとする関係各位の御理解・御協力を得ることができた。特に、発掘作業員として参加された近在の方々には猛暑の中御協力いただいた。また、地元の方々にはひとかたならぬ御理解をいただき、無事に発掘調査を終了することができたことを、深く感謝いたします。

II. 位置と環境

地理的環境

遺跡の所在する久留米市三瀧町(旧三瀧郡三瀧町)は福岡県南西部の筑後平野の中央部に位置しており、三瀧町は現久留米市の南西部にあたる。三瀧郡三瀧町は平成17年2月5日付けで久留米市・田主丸町・城島町・北野町と合併し、現久留米市となった。

筑後平野は有明海に注ぐ筑後川とその支流の河川によって形成された九州最大の沖積平野であり、三瀧町は筑後川の中流域南岸に位置する。耳繩山麓から広がる八女丘陵の西端は旧河川によって開削された谷のためにハッ手状を呈しており、そのハッ手の1つが西に細長く延びている。そしてその最西部を町の中心として、周囲に標高4～6mの低湿なデルタ地帯が広がっている。

本遺跡の所在する三瀧町北東部の西牟田地区は広川の南岸にあたり、河岸段丘が形成されている。この段丘を形成した河川は川床が深く、段丘上に小河川がないため地上には多くの溜め池が設けられている。西牟田地区は、隣接する筑後市西牟田地区と1つの地域であったが、戦後の市町村再編の折に、筑後市と分割再編されて現在に至っている。

歴史的環境

本遺跡の所在する八女丘陵西端部には、旧石器時代の石器は散見されるものの明瞭な遺構は確認されていない。久留米市庄屋野遺跡⁸¹・穴口遺跡⁸²・車地遺跡⁸³からは細石刃・細石核・角錐状石器などが、筑後市蔵敷坂口遺跡⁸⁴でも角錐状石器が出土しているが、生活面が存在していたのか、狩猟に伴うキルサイトなのかは、今後究明する課題である。

久留米市西南地域では縄文時代の集落遺跡は確認されていないが、早期に属すると推定されている落し穴遺構は多数存在している。特に、久留米市安武地区遺跡群(穴口遺跡、庄屋野遺跡、古牟田遺跡⁸⁵、念仏塚遺跡⁸⁶、今泉・坂本遺跡⁸⁷)で集中的に発見されており、その数は200基以上にのぼる。

低段丘への集落の進出は、現段階では、弥生時代前期末から中期初頭まで待たなければならない。この時期の集落としては広川の北側では久留米市今泉遺跡C地点⁸⁸、南側では塚崎東畑遺跡⁸⁹や西牟田清尊寺浦遺跡⁹⁰に代表される。弥生時代中期以後は、広川北岸は久留米市塚畑・女掘遺跡⁹¹を、南岸は「高三瀧式土器」の標識遺跡となった高三瀧遺跡群を中心として集落が拡大し、拠点的な大規模集落が形成されたようだ。

両岸での拠点集落の存在は青銅器の出土の多さから傍証できる。北岸の久留米市安武地区の道蔵遺跡では大正3年に甕棺とともに銅戈が出土しており⁹²、有力者の存在が窺える。また、この他にも、青銅製鉋や銅鏡が出土している⁹³。南岸の高三瀧地区でも御廟塚遺跡⁹⁴から細形銅剣2口が、隣接する鳥帽子塚遺跡⁹⁵付近からも銅剣が2口出土したと伝えられている。高三瀧地区のこれらの遺跡は実態がわかっておらず、今後整備を含めた調査が必要であろう。高三瀧遺跡群での本格的な発掘調査は、現在のところ塚崎東畑遺跡⁹⁶のみだが、そこからは弥生中期の骨鏃・石鏃が刺さった人骨が出土しており、当時の緊張した社会情勢を窺い知ることができる。また、やや南に位置する玉嵩松木ノ遺跡⁹⁷では断面V字形の溝をもつ後期の集落が確認されており、防衛的性格を持った集落が存在していたこともわかってきている。



- | | | | | | | |
|---------------|---------------|------------|-----------------|-----------------|-----------------|----------------|
| 1 西牟田大立遺跡 | 33 菅原理具庫 | 65 出水ノ上1号墳 | 97 吹上内遺 | 129 組合古墳 | 161 本山遺跡 | 193 一幡町遺跡 |
| 2 西牟田北原遺跡 | 34 新堀遺跡 | 66 出水ノ上2号墳 | 98 村岡古墳 | 130 今高遺跡 | 162 上津ノ子遺跡 | 194 町王寺古墳 |
| 3 西牟田平野遺跡2次 | 35 貞二陸遺跡群 | 67 出水ノ上3号墳 | 99 天満原古墳 | 131 敷木遺跡 | 163 原ノ尾遺跡 | 195 丸尾遺跡 |
| 4 西牟田遺跡群 | 36 久保遺跡 | 68 五反田遺跡 | 100 史跡跡群-徳院塚内墳 | 132 野木2号墳 | 164 原尾遺跡 | 196 丸尾山遺跡 |
| 5 西牟田遺跡 | 37 五十町3号古墳 | 69 白口西古墳遺跡 | 101 丸塚ノ馬 | 133 野木3号墳 | 165 丸尾山古墳 | 197 穴太古墳 |
| 6 西牟田平野遺跡1次 | 38 西野立崩群 | 70 通船遺跡 | 102 馬塚2号墳 | 134 杉ノ本遺跡 | 166 上津土壁 | 198 崎岡山古墳 |
| 7 十八間池遺跡 | 39 外野遺跡 | 71 西ノ原遺跡 | 103 沙入遺跡 | 135 志保原遺跡 | 167 平野遺跡 | 199 崎岡中ノ玉遺跡 |
| 8 西牟田池田寺遺跡 | 40 寛永寺宮脇遺跡1次 | 72 西ノ原7号墳 | 104 新田山遺跡 | 136 徳島遺跡 | 168 平野遺跡 | 200 久保平代遺跡 |
| 9 十崎宮古墳 | 41 寛永寺宮脇遺跡2次 | 73 名瀬塚古墳 | 105 泉野遺跡 | 137 寺島遺跡 | 169 水野遺跡 | 201 久保大石口遺跡 |
| 10 西牟田平野遺跡3次 | 42 寛永寺宮脇遺跡3次 | 74 三反田遺跡 | 106 矢掛塚遺跡 | 138 神方遺跡 | 170 中西山遺跡 | 202 池野野見遺跡 |
| 11 水ノ下遺跡 | 43 一の左右遺跡1次 | 75 白口結碑遺跡 | 107 藤原寺遺跡(三尊跡跡) | 139 安次三郎野遺跡 | 171 新地遺跡 | 203 西野立遺跡群1次 |
| 12 早瀬遺跡 | 44 一の左右遺跡4次 | 76 白口中央遺跡 | 108 菅原遺跡 | 140 西野遺跡 | 172 西野山古墳群 | 204 西野立遺跡群2次 |
| 13 ベニ遺跡 | 45 一の左右遺跡5次 | 77 興正殿遺跡 | 109 興正殿遺跡 | 141 女島遺跡 | 173 西代岡南寺出土土器定地 | 205 興正院興正殿寺瓦布地 |
| 14 田中遺跡 | 46 一の左右遺跡3次 | 78 清古門城戸遺跡 | 110 陸院遺跡 | 142 上野遺跡 | 174 天神池池畔寺土器定地 | 206 久保島遺跡 |
| 15 甲斐遺跡 | 47 西野遺跡 | 79 北山古墳群 | 111 西向遺跡 | 143 野正免遺跡 | 175 才崎塚古墳 | 207 高江遺跡 |
| 16 村岡・井・堀ノ口遺跡 | 48 鬼毛遺跡 | 80 白口山輪郭跡 | 112 乙名寺(伝説寺名石室) | 144 古谷山遺跡 | 176 赤石宮古墳 | 208 高江野跡 |
| 17 山伏塚 | 49 立毛古墳 | 81 向定堂古墳 | 113 中寺遺跡 | 145 穴口遺跡 | 177 天神宮古墳 | 209 西牟田上野手遺跡 |
| 18 蓮子中田遺跡 | 50 寺脇1号墳 | 82 向定堂遺跡 | 114 塚中遺跡 | 146 任野野遺跡(1~4次) | 178 高塚古墳 | 210 西牟田野遺跡 |
| 19 小塚古墳 | 51 寺脇2号墳 | 83 本の内古墳 | 115 塚遺跡 | 147 任野野遺跡(5次) | 179 池田古墳群 | 211 西牟田池田寺定地 |
| 20 玉置町遺跡 | 52 寺脇遺跡 | 84 堀内古墳 | 116 土井外山遺跡 | 148 山ノ内遺跡 | 180 高塚山古墳 | 212 北野寺 |
| 21 どんどん山古墳 | 53 徳小路西古墳 | 85 堀内西古墳 | 117 土井外山遺跡 | 149 田中遺跡 | 181 高古墳 | 213 村小次郎丸遺跡 |
| 22 玉置水ノノ遺跡 | 54 聖人神古墳 | 86 岡山古墳 | 118 天徳寺土井内遺跡 | 150 徳彌野白遺跡 | 182 大塚山古墳群 | 214 西牟田野寺遺跡 |
| 23 犬の古墳 | 55 聖人寺遺跡 | 87 白地古墳 | 119 土ノ山古墳 | 151 徳彌野古墳 | 183 西野遺跡 | 215 堀野寺 |
| 24 高塚遺跡 | 56 富嶺遺跡 | 88 聖徳寺古墳 | 120 徳彌野遺跡 | 152 住津西古墳 | 184 北の原遺跡 | 216 堀野遺跡 |
| 25 高塚寺 | 57 赤崎古墳 | 89 聖徳社古墳 | 121 ころも塚古墳 | 153 車塚遺跡 | 185 赤崎遺跡 | 217 堀野遺跡 |
| 26 高塚遺跡 | 58 二子塚遺跡 | 90 徳の殿古墳 | 122 藤塚古墳 | 154 聖井原遺跡 | 186 崎岡遺跡 | 218 堀野遺跡 |
| 27 藤原寺遺跡 | 59 三子塚古墳 | 91 聖徳寺 | 123 西島遺跡 | 155 古知の遺跡 | 187 菅原遺跡 | 219 堀野遺跡 |
| 28 三郎小学校校庭遺跡 | 60 小通橋跡(聖徳寺跡) | 92 野口遺跡 | 124 山崎遺跡 | 156 本原山遺跡 | 188 菅原遺跡 | 220 平野遺跡 |
| 29 西三郎古墳 | 61 小寺遺跡 | 93 野口山遺跡 | 125 結崎遺跡 | 157 風原寺立遺跡 | 189 史跡化入山古墳 | |
| 30 北小宮古墳 | 62 寺ノ寺遺跡 | 94 堀野古墳 | 126 筒子塚古墳 | 158 堀野古墳 | 190 史跡化入古墳 | |
| 31 藤原池遺跡 | 63 富嶺遺跡 | 95 富嶺遺跡 | 127 文正寺 | 159 堀野古墳 | 191 堀ノ谷遺跡 | |
| 32 新堀 | 64 丸塚古墳 | 96 丸塚寺遺跡 | 128 今高古墳 | 160 牟田古墳群 | 192 尾敷野遺跡 | |

第2図 西牟田大立遺跡・西牟田北原遺跡・西牟田平野遺跡(2次調査)周辺遺跡分布図(1/50,000)

久留米市荒木町荒木・白口地区では弥生中期から後期の寺脇遺跡があり、同一遺跡と見られる鬼木遺跡で江戸時代に広形銅矛の出土が伝えられている。広川町域でも、広川町森園遺跡で200基を越す集団墓地が発見されており、広川の対岸丘陵にある久留米市荒木町藤田天神浦銅矛出土推定地遺跡では13口の中広形銅矛が、藤田田代堤銅矛出土推定地跡では5口の中広形銅矛が一括出土していることから、拠点集落の存在を窺わせる。西牟田地区でも蔵数森ノ木遺跡で中期以降の大規模集落が確認されている。調査地点に近い弥生時代の遺跡としては十八銭亀遺跡があるが、散布地として周知されているのみである。

本地域は古墳時代の前・中期は遺跡が少ないものの、後期になると全国的にも著名な古墳が築かれるようになる。以下、古墳群の分布から明瞭に把握される小地域ごとに見てみよう。

低段丘の広川北岸地域は、久留米市御塚・権現塚古墳（国指定）の築造を契機として多くの古墳が点在して築かれる。広川南岸地域では小古墳が多いがほとんどが開発で削平されてしまい、現在では裏畑古墳のみが現存している。久留米市荒木町荒木地区は前方後円墳の可能性のある鷲塚古墳と前方後円墳の二子塚古墳に代表される。このように低段丘・低台地では小古墳が点在しているが、久留米市向野古墳群のようにすでに削平されて地表ではみることのできない小古墳も存在している可能性がある。

一方、後背に八女丘陵をもつ久留米市荒木町今地区・西牟田地区から筑後市蔵数・前津地区一帯では、小古墳群のかわりに八女古墳群の先端部分が位置している。三瀬町東部の久留米市十進寺古墳は八女古墳群の最西部に位置する大型古墳である。墳裾を削平されたため大型円墳とも帆立貝形前方後円墳ともいわれており、今後確認調査が必要である。八女丘陵を東に行くと、続いて筑後市瑞王寺古墳群、石製表飾の樹立する大型前方後円墳の石人山古墳、装飾古墳の弘化谷古墳（国史跡）があり、その南側の丘陵には欠塚古墳が存在している。

久留米市御塚・権現塚古墳は水沼君の墳墓、八女古墳群は筑紫君一族の墳墓とされており、三瀬町域は双方に近接しているためどちらの支配地域に入っていたのかはよくわからないが、有力な豪族のもとで栄えたことが推察される。なお、この時代の集落遺跡では筑後市蔵数森ノ木遺跡・北の前遺跡などがある。

奈良時代に入ると、筑紫国は筑前国・筑後国に分けられ、現在の久留米市に筑後国府跡が置かれた。当時の筑後国には10郡が置かれており、本遺跡周辺は「三瀬郡」に含まれている。平安時代に撰ばれた『和名類聚抄』には、「三瀬郡」のなかに「高家・田家・三猪（瀬）・鳥養・夜關（閉）・青木・荒木・管綜」の8郷が記載されており、このうち高三瀬一帯は「三瀬郷」、荒木町一帯は「荒木郷」に比定される。

これらの郷を統括する三瀬郡衙には久留米市道蔵遺跡が比定されており、そこからは「三万領」「三万少領」の墨書土器や、転用硯、石製権など公的機関にしか見られない遺物が出土している。また、近接する市指定の野瀬塚遺跡では「田家郷家」か、郡衙の出先機関と見られる建物群が発見されている。

筑後国府を経由する官道の「西海道」は久留米市車地遺跡などで発掘されており、そのルートが明らかになりつつある。また、この道路を基軸として条里遺構が展開しており、現地形と古い地名から条里が復元されている。久留米市荒木町の推定条里は、出川地区にも広がる可能性があり、田川大野遺跡で検出された溝は条里の方向に一致しているので、今後の周辺地区の調査成果を踏まえ

た検討が必要であろう。

平安時代になると、律令制度が動揺し各地に荘園が作られるようになるが、この地域にも「三瀧庄」という荘園の存在が知られている。「三瀧庄」は東寺文書平治元（1159）年閏5月の「宝荘厳院領荘園注進」に見えるものが最古で、それには宝荘厳院を領家とする荘園の預所名と年貢物が書かれている。国府や郡衙に近いこの地域では荘園化が遅く、国衙領が多く残っていたと思われるが、それも次第に「三瀧庄」に編入されていったのではないだろうか。

鎌倉時代になると、鎌倉幕府によって全国に守護・地頭が置かれたが、本地域にも地頭として記録に残された人物がいる。正元元（1259）年に高三瀧村に補任じられた横溝五郎と、延応年間（1239～1240）には西牟田村に補任された西牟田氏の祖の藤原家綱である。横溝氏の本拠地として高三瀧に横溝氏館跡が、やや離れて居城とされる田川城跡が知られている。一方、西牟田氏の居城は筑後市の西牟田城跡や生津城跡とされている。大善寺町の荊津館跡からは13代に属する館を囲む溝らしいものが検出されている。

南北朝時代には九州探題となった淡川氏や犬塚氏・隈氏が居城を置いた犬塚城跡があり、安武地区の安武氏の居城である海津城跡からは発掘調査で室町～戦国時代の豊富な輸入陶磁器が出土している。

江戸時代になると、この地域は久留米藩に属する。江戸前期には久留米藩とその南に位置する柳川藩をつなぐ久留米柳川往還跡が整備され、小犬塚村には一里塚跡が設けられた。

発掘調査された遺跡としては西牟田平野遺跡で江戸時代のもつと見られる大型掘立柱建物がある。性格は不明だが、規模から見て一般の民家ではない。

また、西牟田大立遺跡内を横断する溝は、「千間溝」と呼ばれる、総延長約6km（一里二十町）の江戸時代の用水路である。「千間溝」は広川町五ノ家から久留米市東本村にかけて、慶長10（1605）年に掘削されたものである。「千間溝」の建設に関しては、十連寺公園に樹立されている『千間溝開設之碑』に記載がある。それによると、元禄年中（1688）、西牟田村本百姓平田半兵衛が西牟田郷の用水不足を憂いて、広川町大字当条字五の家に堰を築き、筑後市一条を通過して、久留米市（旧三瀧町）東本村まで溝を開削し、荒木川の水を引いたものである。

現在は大部分がコンクリート護岸になっており、旧状を残すところはわずかである。文化財として指定されていないが、この溝の開削によって多くの水田が新たに開かれており、旧三瀧町域の土地開発史を物語る資料であることはまちがいない。なお、工事を起工し、私財を投じて施工にあたった平田半兵衛の墓碑は、その功績を顕彰するために保存処置がとられている。

旧三瀧町は県内でも有数の穀倉地帯であるが、そこへ至るまでの低台地への開発の歴史が、本地域には多く残されている。



久留米市三瀧町十連寺公園の千間溝開設之碑

註

1. 萩原裕房・富永直樹1989『安武地区道跡群Ⅱ』久留米市文化財調査報告書第60集 久留米市教育委員会
2. 同上
3. 大石昇・小沢太郎1988『上津・藤先道跡群Ⅱ』久留米市文化財調査報告書第145集 久留米市教育委員会
4. 筑後市史編さん委員会1997『筑後市史』第一巻 筑後市
前掲註1
5. 富永直樹1992『安武地区道跡群Ⅵ』久留米市文化財調査報告書第72集 久留米市教育委員会
7. 白木守1994『安武地区道跡群』久留米市史 第12巻資料編考古
久留米市史編さん委員会
8. 富永直樹1991『第1章 調査の経過』『安武地区道跡群Ⅴ』久留米市文化財調査報告書第69集 久留米市教育委員会
9. 佐々木隆彦1997『塚崎東端道跡』福岡県文化財調査報告書第127集
福岡県教育委員会
10. 塚本映子2001『西牟田清導寺浦道跡』三瀬町文化財調査報告書第7集 三瀬町教育委員会
11. 萩原裕房・富永直樹1988『安武地区道跡群Ⅰ』久留米市文化財調査報告書第56集 久留米市教育委員会
12. 中山平次郎1917『銅鈴銅剣発見地の遺物追加』『考古学雑誌』第8巻第10号
13. 大石直樹・近澤康治1991『道武道跡』久留米市文化財調査報告第68集 久留米市教育委員会
小澤太郎2006『筑後国三瀬郡面跡Ⅱ』久留米市文化財調査報告第212集 久留米市教育委員会
14. 中山平次郎1920『塚崎西畑の御廟塚』『考古学雑誌』20-1
15. 中山平次郎1918『銅鈴銅剣に石剣発見地の遺物(上)』『考古学雑誌』8-8
前掲註8
16. 塚本映子1998『玉瀧松木ノノ道跡』三瀬町文化財調査報告書第8集 三瀬町教育委員会
18. 上村敏雄1961『筑後寺尾道跡の弥生式土器』『九州考古学』13
19. 久留米市史編纂室1996『第2章 弥生時代 18 鬼木出土の広形銅矛』『久留米市史第12巻 資料編考古』久留米市
20. 佐々木隆彦2004『森園道跡(墓地編)』広川町文化財調査報告書第22集 広川町教育委員会
21. 尾崎源太郎2001『天神裏出土銅矛』広川町教育委員会
22. 同上
23. 佐々木隆彦1990『蕨蔵道跡群』筑後市文化財調査報告書第6集 筑後市教育委員会
24. 福岡県教育委員会1979『福岡県道跡分布地図(大川市・筑後市・三瀬郡編)』福岡県教育委員会第71集 福岡県教育委員会
25. 久留米市史編纂室1996『第三章 古墳時代 29 御塚・櫛形塚古墳』『久留米市史』第12巻資料編考古 久留米市史編さん委員会
26. 三瀬町文化財探訪編集委員会1997『三瀬町文化財探訪』三瀬町教育委員会
27. 川辺昭人編1985『龍音丸道跡 向野古墳群 三船山道跡』福岡県文化財調査報告書第71集 福岡県教育委員会
28. 久留米市史編纂室1996『第三章 古墳時代 27 二子塚古墳』『久留米市史』第12巻資料編考古 久留米市史編さん委員会
29. 同上
30. 前掲註26
31. 川辺昭人1984『瑞王寺古墳』筑後市文化財調査報告書第3集 筑後市教育委員会
32. 川辺昭人1984『村編 石人山古墳出土遺物』『瑞王寺古墳』筑後市文化財調査報告書第3集 筑後市教育委員会
33. 佐々木隆彦1991『弘化谷古墳』広川町文化財調査報告書第8集 広川町教育委員会
34. 佐田茂1993『久塚古墳』筑後市文化財調査報告書第8集 筑後市教育委員会
35. 前掲註23
36. 佐々木隆彦1992『北の前道跡Ⅰ』広川町文化財調査報告書第9集 広川町教育委員会
佐々木隆彦1993『北の前道跡Ⅱ』広川町文化財調査報告書第10集 広川町教育委員会
37. 久留米市史編纂室1996『第四章 歴史時代① 1 筑後国府跡』『久留米市史』第12巻資料編考古 久留米市史編さん委員会
前掲註12
39. 富永直樹1994『野瀬塚道跡』『久留米市史』第12巻資料編考古 久留米市史編さん委員会
40. 前掲註26
41. 塚本映子1997『田川大野道跡』三瀬町文化財調査報告書第5集 三瀬町教育委員会
42. 前掲註26
43. 前掲註26
44. 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会1972『西牟田むら生いたちの記』筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
45. 前掲註26
46. 前掲註12
47. 前掲註26
48. 白木守1994『安武地区道跡群Ⅲ』久留米市文化財調査報告書第87集 久留米市教育委員会
49. 福岡県三瀬郡役所1973『福岡縣三瀬郡誌』名著出版
50. 前掲註26
51. 塚本映子2004『西牟田平野道跡』三瀬町文化財調査報告書第8集 三瀬町教育委員会
52. 前掲註44



西牟田大立地区の千間溝(西から)

Ⅲ. 調査の内容

1. 西牟田大立遺跡

西牟田大立遺跡は三澗郡三澗町大字西牟田字大立・平野に所在し、今回は字大立6175-3、6199-2、6200-4、6202-2、6201-4、6223-3番地、字平野6171-11番地を本調査した。調査面積は約2,000㎡である。調査は平成15（2003）年7月10日から9月30日の間に行った。

事前工事として県道84号線から工用道路を敷設するために、まず千間溝に仮橋を架けるという工程であったため、大立遺跡Ⅰ区を先に調査して引き渡したのち、Ⅱ・Ⅲ区を調査した。

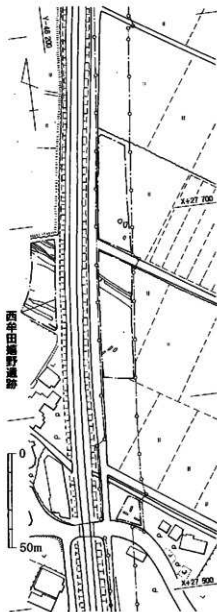
また、Ⅱ・Ⅲ区については町道の付け替え工事も併行して行われることから、町道分も同時に調査した。

7月10日に重機で作業ヤードの整地を開始し、11日から表土剥ぎを開始。14日にユニットハウス等を搬入する。14日に回覧版によって募集した作業員の面接を行い、16日に機材を搬入し、17日から人力による掘削を開始した。

8月4日にⅠ区の調査を終了し、埋め戻す。Ⅱ・Ⅲ区の調査と併行して北原地区の試掘を実施する。9月19日、Ⅱ・Ⅲ区の空中写真撮影。撮影後、埋め戻し開始。9月22日にユニットハウスや機材を次の調査地点である北原地区に移設し、9月30日に埋め戻しを完了している。

Ⅲ区では溝状の攪乱が多く、埋土がどれも等しく、送電線の支線坑がこれを切っていた。この支線坑と同じような形態の土坑から1929（昭和4）年の銘の入った磁器片が出土したことから、この支線坑は大正時代の圃場整備の跡に掘削されたものであり、多くの溝状の攪乱は圃場整備のものと判断した。さらに、抜根穴と明確にわかるものは遺構から除外した。その結果、Ⅰ区では溝2条・地割れ跡1条・噴砂1箇所、Ⅱ区では土坑1基・井戸1基・溝5条、Ⅲ区では土坑3基が検出された。

遺構番号は調査工程上、Ⅰ区とⅡ・Ⅲ区で別につけているため、本報告も同様にⅠ区とⅡ・Ⅲ区を分けて報告する。



第3図 西牟田大立遺跡遺構略配置図
(1/2,000)

1) I区の遺構と遺物

I区の北側は千間溝の腰壁を設置した際の攪乱が入っており、西側には揚水ポンプの基礎を作った際の攪乱が入っていた。地形は北に向かってやや下がっているが、ほぼ平坦であり、千間溝も南の現道も台地を大きく掘削したことがわかる。

風倒木痕が1基見られたが、半截してみたところ遺物も出土せず、報告対象から外した。

1号溝状遺構 (図版1-1・2、第4図)

I区の南に南東から北西に走り、中間が離れている。東端も途切れているが、削平によるものと考えられ、埋土は同じ漆黒色土で規模も等しいので、一連の溝と判断した。幅は広いところで約70cm、深さは深いところで27cmを測る。

出土遺物が少なく時期を特定しにくい、近世の焙烙片の存在から、江戸時代のものと考えられる。隣接する元禄10(1697)年の年号がある「川原傳左衛門墓」^墓と関連があるのかもしれない。

出土遺物 (図版6、第9図1)

1は土師質土器の焙烙の口縁部で、口縁部は内外ナデ。口縁下の屈曲下部は未調整。内外橙褐色を呈する。

2号溝状遺構 (図版1-1・3、第4図)

I区の中央部を南南西から北北東に走り、細長い土坑状を呈する。幅は広いところで約20cm、深さは深いところで約30cmを測る。出土遺物はなく、時期はわからないが、1号溝状遺構と異なる埋土であり、近世以前の可能性が高い。

地割れ跡・噴砂 (図版2-2・3、第4図)

地割れ跡はI区の西側にあり、攪乱に大きく切られている。南西から北東に走っており、途中途切れている。図化していないが、絶ち割りを入れてみたところ、30cmほどで割れがなくなった。掘り上げた範囲でも20cmを超える深さはなかった。

噴砂は中央部の風倒木痕の南に見られた。検出面で粗砂が広がる部分があり、地割れ跡とほぼ同じ方向を向いていた。図化していないが、重機で断ち割ってみたところ、噴砂は下に行くほど広がっており、50cm程の深さで基盤層下の砂礫層に達し、そこから上がってきたものだった。



第4図 西傘田大立遺跡I区遺構配置図 (1/200)

2) II・III区の遺構と遺物

II・III区の現地形は平坦だがこれは削平によるもので、ピットの分布から見てIII区の南半が大きく削平されており、北に向かって下がっていたと考えられる。

II区の北側には1号溝状遺構と2～4号溝状遺構が北西から南東に併走しており、後者の北側には同じ方向のピット列が見られた。このピット列は直線的な配置でないことから、柵跡ではないと判断して、遺構として報告しないものとするが、溝とセットになって機能していた可能性はある。

III区は現代の水田区画の軸と同方向の浅い攪乱溝が多数入り、攪乱溝を掘り下げて下に遺構があるか確認したが、南側に土坑が見られ、北側はピットが散見されるのみだった。

両区とも抜根跡が多かったが、大正時代の耕地整理時に抜かれたものであろう。

1. 土坑

1号土坑 (図版4-1・2、第7図)

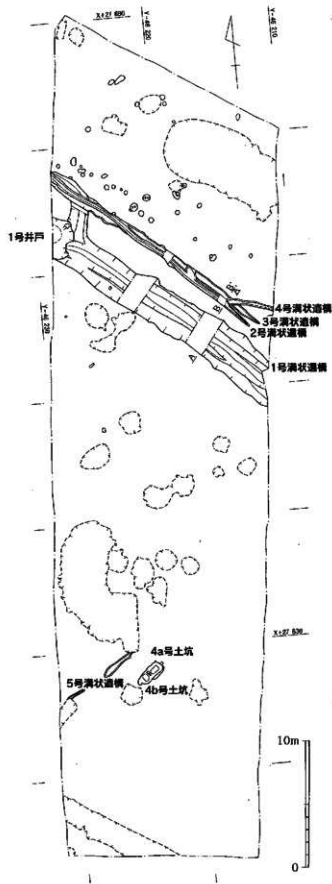
III区の南東側に検出された、径2.45mの円形プランで、深さ40cmと浅く、床面はやや凹凸があり、楕円形の断面形を呈する。

上面を攪乱溝に切られており、それ以前のものと思われる。床面に小穴が見られ、抜根痕の可能性を残す。

時期については、陶器甕の胴部片が1点出土しており、近世以降のものと推定できる。

出土遺物 (図版6-4、第9図5)

5は肥前系陶器の甕の胴部片であり、器壁の厚さと胴径から半胴甕であろう。内外面鉄釉で、茶褐色を呈し、内外面に格子目叩きがある。



第5図 西傘田大立遺跡II区遺構配置図 (1/300)

2号土坑 (図版4-3、第7図)

Ⅲ区の南東隅に検出された、長軸1.50m、短軸1.19mの小型の方形プランで、深さ18cmで床面はほぼ平坦。出土遺物はなく、時期は不明。

3号土坑 (図版4-4・5、第7図)

Ⅲ区の南東端の長軸3.7m、短軸2.37m、深さ75cmの大型長方形プランで、床面はほぼ平坦。壁は斜めに立ち上がっており、底面が細長い。

5層までの上位層は新しく埋め戻された埋土だった。最下層は砂質土で、水が湧いた。貯水槽としての機能が想定される。出土遺物はない。

4a・4b号土坑 (図版5-1・2、第7図)

Ⅱ区の南部に検出された、2つの土坑が切り合っており、検出時には切り合いがわからなかった。4a号は方形プランで、長軸1.35m、短軸1.23m、深さ35cmを測る。4b号は長方形プランで、長軸1.18m、短軸0.98m、深さ29cmを測り、土層から4a号土坑が切っていた。出土遺物はない。

2. 井戸

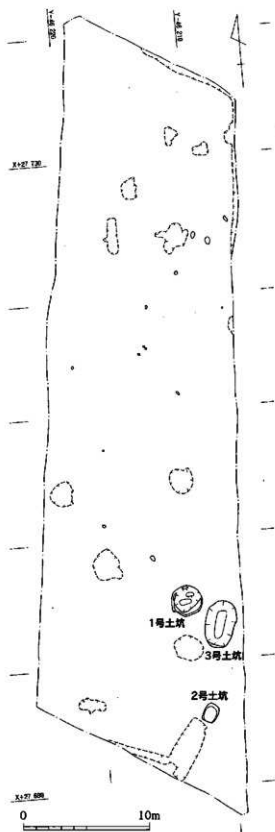
1号井戸 (図版5-3・4、第8図)

Ⅱ区の北西側に位置し、半分が調査区外にかかる。土層から1号溝状遺構に切られていることがわかる。

上面を切られているため不正形だが、径は約3.4mで、壁は斜めに立ち上がっており、底の径は約1.6mであった。

壁面の上位は粘土層だが、下層にはバンド状に砂礫層が入っており、そこから激しく湧水した。深さは1.3mと浅かったが、湧水層にあたったところで掘り止めたものと思われる。

出土遺物は見られず、時期は不明だが古墳時代後期の1号溝状遺構より古い。

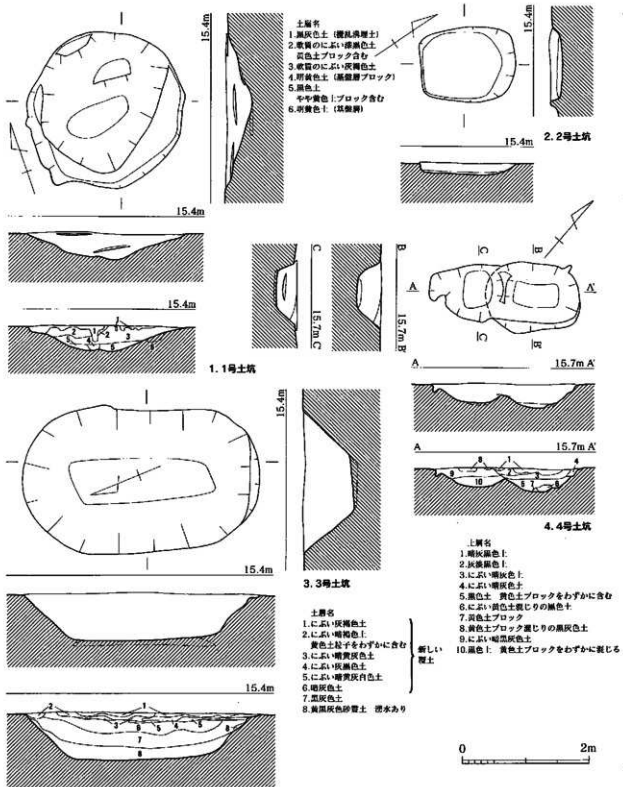


第6図 西牟田大立遺跡Ⅲ区遺構配置図 (1/300)

3. 溝状遺構

1号溝状遺構 (図版6-1・2、第8図)

Ⅱ区の北側に直線的に南東から北西に走る溝で、北端部が二股に分かれて片方は北に曲がっている



第7図 土坑実測図 (1/60)

る。切り合いは検出段階から明白で、直線に走る方向が新しい。1号井戸は本遺構にちょうど収まっていたため、検出段階ではわからなかったが、土層から本遺構が1号井戸を切っていた。

北端が北に曲がる部分は1号井戸をよけて掘られているようにみえ、底面は直線部分よりやや浅い。北に曲がる部分は2~4号溝状遺構に明確に切られていた。

埋土は上位と下位に大きく分かれ、上位の埋土は中世以降に見られるもので掘り直されたものであろう。上位層の下層には粗砂層があり、流水があったようだ。上下層の境には黒色土層があり、この黒色土層上面が地表になった時期があることがわかる。最下位は粗砂質土であることからそこでも流水があったものと思われる。

これらのことをまとめると、本溝は最初北端部が井戸をよけて北に曲がるように掘られ、次に直線にやや深く掘り直され、この段階の溝がほぼ埋まりきってから、浅い溝が掘られている。少なくとも2・3段階では水が流れていたであろう。

本遺構は西牟田墳野遺跡SD3に対応し、その層位でも3回の掘り直しが観察されている。

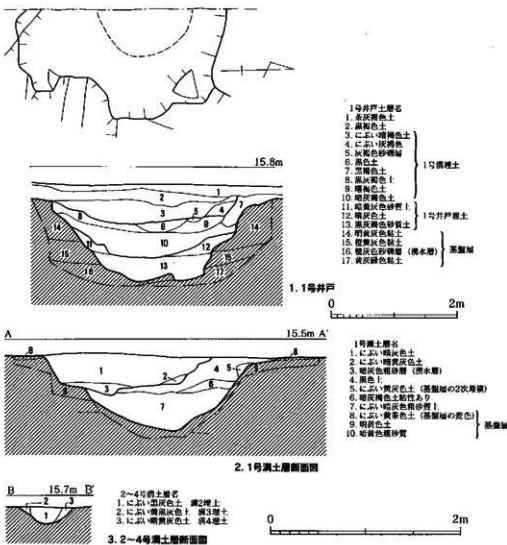
床面は東から西へ低くなっており、深さは概ね65~70cmを測る。

出土遺物は非常に少なく、時期を捉えにくい。直線部分の最下位の粗砂質土層からは、整理段階で紛失してしま

ったが、6c代の黒漆塗り土師器碗片が出土していた。3つの段階を考慮すると、最初に掘られたのは弥生時代中期あるいは後期で、直線に掘られたのが6c代であろう。最後の掘り直しは中世以降と考えられる。

出土遺物(図版6-4、第9図2~4)

弥生土器(2~4) 2は器種不明の口縁部で、小片で口唇部に歪みがあるため、傾きは不



第8図 1号井戸実測図(1/60)、1~4号溝状遺構土層断面図(1/40)

確実である。内面の口縁下を窪ませて口唇部に平坦面を作っていることから、口径の大きいものと見られる。器壁が薄いと、煮沸による変色がないことを考え合わせると、広口壺か高杯の口縁部であろう。外面の口縁下に凹線が見られるが、意図的なものかは不明である。

色調は内外橙色で、胎土は比較的精良。3は壺か甕の頸部で、変色がないことから、壺の可能性が高い。摩耗しているが外面は頸部から上向きと下向きに幅1.2cmの工具でハケ調整されている。内面はナデと押さえのみ。胎土は白色粒子を多く含みやや粗で、内外にぶい黄白灰色を呈する。4は小型の甕の底部で、小片のため復元できないが底径8cm前後であろう。胴下位まで縦ハケを施す弥生中期の特徴を持つ。欠損面の摩耗が著しい。外面橙褐色、内面にぶい黒灰色を呈する。胎土には角閃石を多く含む。

2号溝状遺構 (図版6-1・3、第8図)

Ⅱ区の北側を1号溝状遺構に併走して直線的に南東から北西に走り、1号溝状遺構の北に曲がる部分と3・4号溝状遺構を切っている。埋土は1号溝状遺構の上位のものと同じであった。西牟田嬉野遺跡のSD1かSD2に対応する。

幅は広いところで55cm、深さは残りの良いところで30cm程度で、床面は東から西に下がっている。出土遺物は非常に少なく、図化に堪えるものがない。土師器の小片がわずかに見られたがローリングを受けており時期を捉えにくい。1号溝状遺構の上位のものと同じ埋土であったことから、中世以降の可能性が高い。

3号溝状遺構 (図版6-1・3、第8図)

Ⅱ区の北側を1号溝状遺構に併走して直線的に南東から北西に走り、1号溝状遺構の北に曲がる部分を切り、2・4号溝状遺構に切られている。西牟田嬉野遺跡のSD1かSD2に対応するものと考えられる。

幅は広いところで約50cm、深さは残りの良いところで25cm程度で、床面は東から西に下がっている。出土遺物は非常に少なく、図化に堪えるものがない。2号溝状遺構に切られており、中世以降の埋土ではないことから、それ以前のものであることだけは指摘できるが、遺物がないため時期を特定できない。

4号溝状遺構 (図版6-1・3、第8図)

Ⅱ区の北側の2号溝状遺構から分かれて、南部が大きく北東に屈曲する。3号溝状遺構を切り、2号溝状遺構に切られており、中世以降の埋土ではないことから、それ以前のものであることだけは指摘できるが、遺物がないため時期を特定できない。西牟田嬉野遺跡のSD1かSD2に対応する。幅は約40cm、深さは残りの良いところで25cm程度。

出土遺物は非常に少なく、図化に堪えるものがない。

5号溝状遺構（図版3-3）

Ⅱ区の南側を直線的に北東から南西に走り、北東部と中央部に検出されなかった部分があるが、大きく削平されたためであろう。幅は広いところで60cmほどあるが、平均して20～30cm。深さは残りの良いところで20cm程度で、出土遺物がないため、時期はわからない。

4. その他の遺構と遺物

擾乱・遺構検出面・根抜穴出土の遺物（図版6-4、第9図6～11）

6・7はⅡ区の根抜穴出土である。6は鉄製のリベットで、頭部は叩かれてやや変形している。時期は不明だが明治時代以降のものかもしれない。7は土師質土器片であろう。鉢の口縁部だろうか。明橙色を呈し、内面ナデ調整。

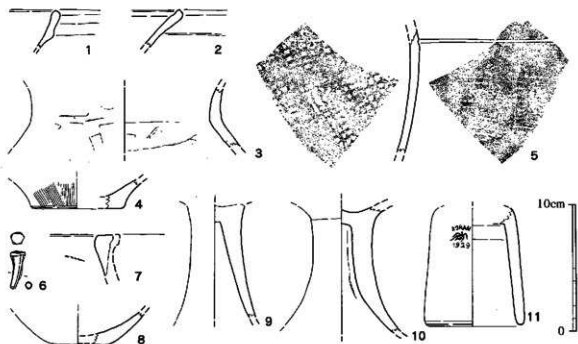
8～10は遺構検出面出土の遺物である。8は壺か甕の底部で、小さい平底と胎土・色調から弥生時代後期のものと考えられる。器面摩滅で調整不明。色調は内外黄褐色。9・10は高杯の脚部で、弥生時代中期か後期のものであろう。両者とも器面が剥落しており、調整は不明で、器面の残っているところで9は茶褐色、10は黄橙褐色を呈する。

11は擾乱坑出土のピン碇子と呼ばれる磁器製の通信（有線）用碇子である。「KORAN」・「1929」の染付から佐賀県有田町に所在する株式会社「香蘭社」のもので、1929（昭和4）年製の製品とわかる。ローマ字の下マークは「香蘭社」の商標で蘭をモチーフにしたものである。^註

通信用の碇子であることから、本遺跡Ⅱ・Ⅲ区や西牟田平野遺跡（2次調査）で多く検出された送電線の支線遺構と関連する可能性が高い。

註

1. 三瀬町文化財探訪編集委員会1997『三瀬町文化財探訪』三瀬町教育委員会
2. 力武卓由1997『史跡横岡城-東の丸の発掘調査-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第546集 福岡市教育委員会



第9図 西牟田大立遺跡出土遺物実測図（1/3）

3) まとめ

本遺跡からは土坑が4基、溝状遺構5条等が検出された。出土遺物もわずかで、成果としては少ないものとなったが、調査結果を周辺の文化財との関係からまとめたい。

溝状遺構の性格

JR鹿兒島本線を挟んで西側には西牟田嬉野遺跡^{註1}が存在しているが、そこから検出されたSD03号溝は本遺跡の2号溝状遺構に対応しており、西牟田嬉野遺跡は大立遺跡と一連の遺跡である。

2号溝状遺構の位置するⅡ区北側は、何条もの溝が掘りなおされているので、谷地形であったと考えられる。また、2号溝状遺構に切られて1号井戸が存在するのも地下水脈が存在しているからであろう。

江戸時代

『三瀨町文化財探訪』^{註2}「川原傳左衛門墓」の項の記述によると、この墓の近くには大きな塚があって、大正中頃の耕地整理で失われたが、それ以前のここの一帯は雑木林であったという。その林の中にコタツ大の盛土がいくつもあり、上には栗石や大石の割れたものを墓碑とした古墓群があり、JR鹿兒島本線を挟んで反対側になる字「十八」の三つ角には板碑が立っている、とある。

川原傳左衛門墓に元禄10(1697)年の年号が入っていることや、板碑があることから見て、この近辺に江戸時代前期の集団墓地があったと考えられるが、試掘調査でも本調査でも、墓壇らしいものは見られなかった。おそらく、墓地はⅠ・Ⅱ区間の千間溝の北側にあり、西牟田耕地整理組合による大正4年の耕地整理で平坦に削平されてしまったのであろう。

地震痕跡について

大立遺跡Ⅰ区で地割れと噴砂が検出された。地割れは南北方向に約13mにわたっており、トレンチを入れたところ噴砂の深さは50cmほどの深さで砂レキ層に達する。

三瀨町内での地震痕跡は初見であるが、広川以北の久留米市内では発掘調査に際して、地震痕跡が発見されている。なかでも久留米市山川前田遺跡^{註3}では水縄断層系追分断層が検出され、4時期の地割れ跡が確認されているが、最も新しいものは古墳時代以後、鎌倉時代以前とされている。また、西に約2キロ離れた筑後国府跡でも水縄断層本体が確認されており、遺構との新旧関係から7c後半～末に限定され、『日本書紀』天武7(678)年12月条に見られる筑紫大地震に比定されている。

本遺跡の地割れ跡・噴砂は遺構との切り合いがなく年代を比定することができないが、上述の地震に伴う可能性はあろう。

註

1. 塚本映子1997『西牟田嬉野遺跡』久留米市文化財調査報告書第4集 三瀨町教育委員会
2. 三瀨町文化財探訪編集委員会1997『三瀨町文化財探訪』三瀨町教育委員会
3. 松村一典他2000『山川前田遺跡 国指定天然記念物「水縄断層」』久留米市文化財調査報告書第163集 久留米市教育委員会
4. 水原道範1993『筑後国府跡H4年度発掘調査報告』久留米市文化財調査報告書第81集 久留米市教育委員会

2. 西牟田北原遺跡

西牟田北原遺跡は三瀧郡（現久留米市）三瀧町大字西牟田字北原に所在し、今回は字北原6266-6、6281-5、6267-1、6270-5、6271-6、6285-5、6271-6、7060-1、6285-5、6289-10番地を調査した。

調査面積は約2,000㎡であり、平成15（2003）年10月1日から10月30日の間に行った。調査範囲をⅠ～Ⅲ区に分け、10月1日にまずⅡ区から表土剥ぎに着手し、遺構のある範囲を確かめた。10月6日にⅡ区の表土剥ぎが終了し、引き続きⅠ区に着手した。この日から人力による掘削も開始した。10月9日からⅢ区の表土剥ぎに着手した。

Ⅱ区の北部は検出面が砂礫層になり、遺構が見られなかったため、排土置き場とした。調査範囲にいている部分に攪乱のビットが並んでいたが、電線やビニールが入っていたので、掘り下げなかった。

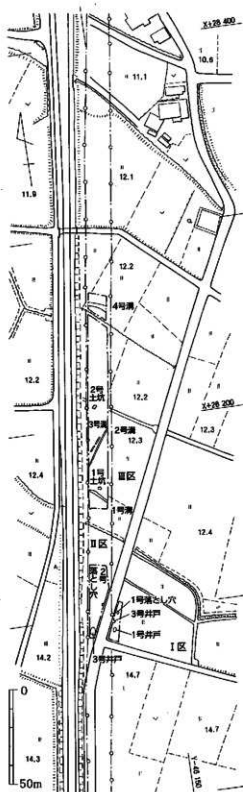
Ⅰ・Ⅱ区の井戸は湧水が激しく壁が崩落して危険なため、土層固作成はもとより完掘もままならなかった。10月15日から小沢の来援を受ける。10月23日に空搬し、10月24日から埋め戻しと井戸の重機での掘り下げなどの補足調査に入り、10月30日に埋め戻しを完了し、撤収した。

土坑7基、溝状遺構9条を検出した。そのほか、多くの風倒木痕があったが、掘り下げたところ遺物が入っていないことから遺構として報告しない。概ね北に倒れているようだ。

1) 土坑

1号土坑（図版8-1、第13図）

Ⅲ区の南部に明瞭に検出された。不正形プランで長辺1.70m、短辺1.32mである。床面はほぼ平坦で、深さ17cmほどを測る。壁の立ちあがりは緩やかである。埋土は黄灰色の基盤層ブロック混じりの黒色土で、出土遺物はなく時期は不明。



第10図 西牟田北原遺跡周辺地形図

(1/2,000)

2号土坑 (図版8-2、第13図)

Ⅲ区の中央部に明瞭に検出された。長方形プランで長辺約165cm、短辺88cmである。床面はほぼ平坦で、深さ15cmほど。

埋上は黄灰色の基盤層ブロック混じりの灰黒色土で、出土遺物がなため時期は不明。

2) 井戸

1号井戸 (図版9-1、第13図)

I区の南部に検出された素掘りの井戸で、試掘調査で上面の西半分を掘り崩している。長軸198cm、短軸176cmの楕円形プランである。壁面は検出面から60cm程下が砂礫第11図 西牟田北原遺跡 I層になり、そこから湧水があり、壁が崩落したため、土層断面図を取ることも底まで掘り下げることもできなかった。

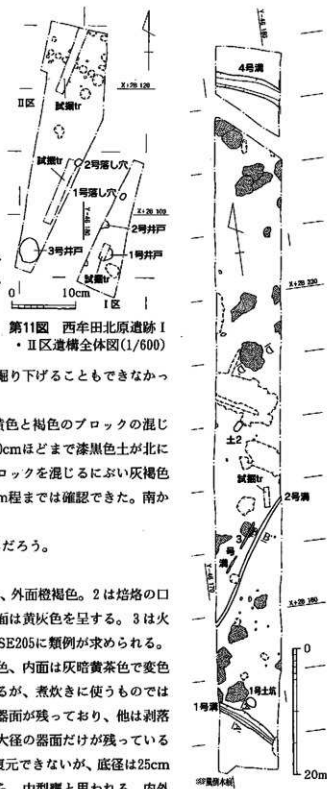
調査メモから、検出面から約50cmまで黄色と褐色のブロックの混じる埋土が皿状に堆積しており、その下に120cmほどまで漆黒色土が北にやや偏って入っていた。最下層は褐色土ブロックを混じるにぶい灰褐色土で、人力で掘り下げることでできた150cm程までは確認できた。南から流れ込んだ状態で堆積していた。

出土遺物の時期から、19c後半代に属するだろう。

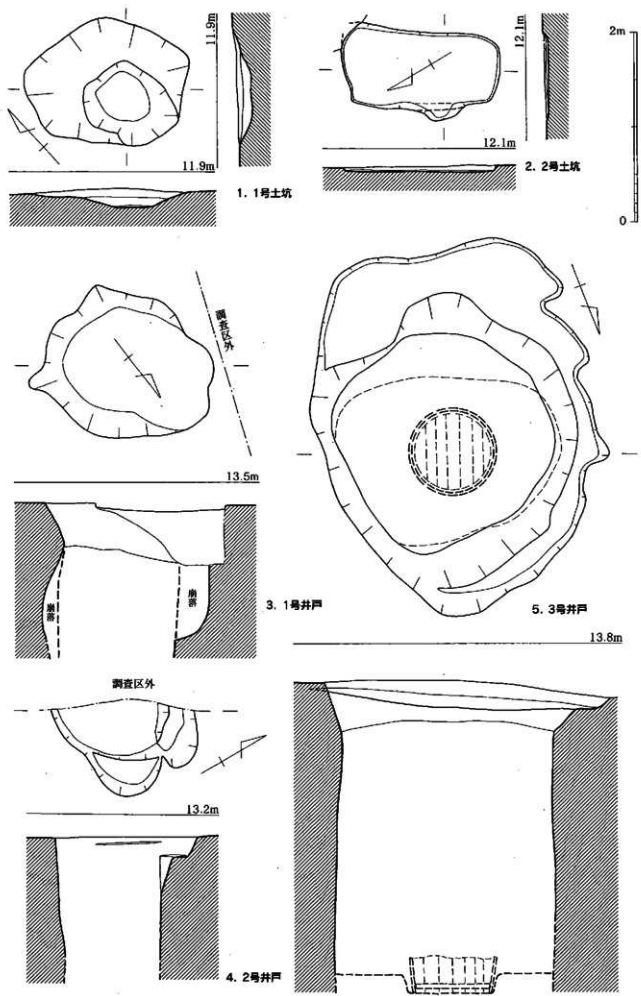
出土遺物 (図版11-1、第14図)

土師質土器 (1~4) 1は鉢の口縁部で、外面橙褐色、2は焙烙の口縁部で、外面は煤が付着して淡黒灰色、内面は黄灰色を呈する。3は火消し壺の胴部で、久留米市両替町遺跡R.A-SE205に類例が求められる。色調は、外面には煤が付着して、暗黒茶褐色、内面は灰暗黄茶色で変色はない。このことから、煮沸使用されているが、煮炊きには使わないようだ。また、外面は胴の最大径のみ器面が残っており、他は剥落していることから、カマドに接する胴の最大径の器面だけが残っているのではなかろうか。4は小片のため、反転復元できないが、底径は25cm前後で、胴下位が大きく傾いて開くことから、中型壺と思われる。内外ともに器面の剥落が激しい。橙褐色を呈しており、変色は見られない。

鐵鉢 (5~7) 5は口縁部で、内外鉄釉が厚くかかっている。小片のため目目の単位は不明。6は内外暗赤茶色の鉄漿がかかっており、見込



第12図 西牟田北原遺跡Ⅲ区遺構全体図 (1/600)



第13図 土坑・井戸実測図 (1/40)

みには重ね焼きの痕跡がつく。摺目は20本単位。7は内外鉄軸が厚くかかっているが、底部は使用のため摩滅している。壺付は釉剥ぎ。5と同一個体の可能性あり。見込みには重ね焼きの痕跡がつく。摺目は細く、19本単位。いずれも19c後半以降の肥前系であろう。

陶器(8・9) 8は土瓶で、暗灰緑色の灰釉が外面と内面口縁部にかかる。胎は橙灰色で白色粒子を多く含む。小石原系か。9は壺の底部で透明釉がかかり、貫入が入る。壺付は釉剥ぎ。胎は半磁器質で灰色を呈し、白色の微粒子を含む。肥前系。

染付(10・11) 10は火入れで、呉須で雪の輪文が手描きされている。釉は青みがかった乳白色の透明釉で、口縁部に厚くかかっている。11は小皿で、内面に雪の輪文が入る。また、見込みを蛇の日に釉剥ぎしており、壺付には砂目跡が付着している。釉は青みがかった透明釉である。10・11ともに肥前系であろう。

平瓦(12) 橙茶褐色を呈し、下面にハケ調整が入るもので、筑後市水田の赤瓦^瓦よりも厚い。胎土は比較的精良で、多くの白粒子とカクセン石、金雲母を含む。

2号井戸(図版9-2、第13図)

1区の西部に検出され、半分が調査区外にある素掘りの井戸である。検出された径で152cmの略円形プランで、1号井戸と同様に検出面から40cmほどで砂礫層に達すると湧水がはじまり、壁が崩落するため、土層断面図を取ることができなかった。調査時のメモから、埋土は検出面から約160cmまで単層で、漆黒色土が入っていた。

また、底面まで掘り下げることでもできず、重機で260cmまでは掘り下げたが、底面を確認できなかった。下位の径は120cmほどで、下位には板石が入っていたが粗んでいたものではなかった。

また、播鉢片や陶器鉢片が出土しており、それらの遺物から18c後半代のものといえる。

出土遺物(図版11-2、第15図)

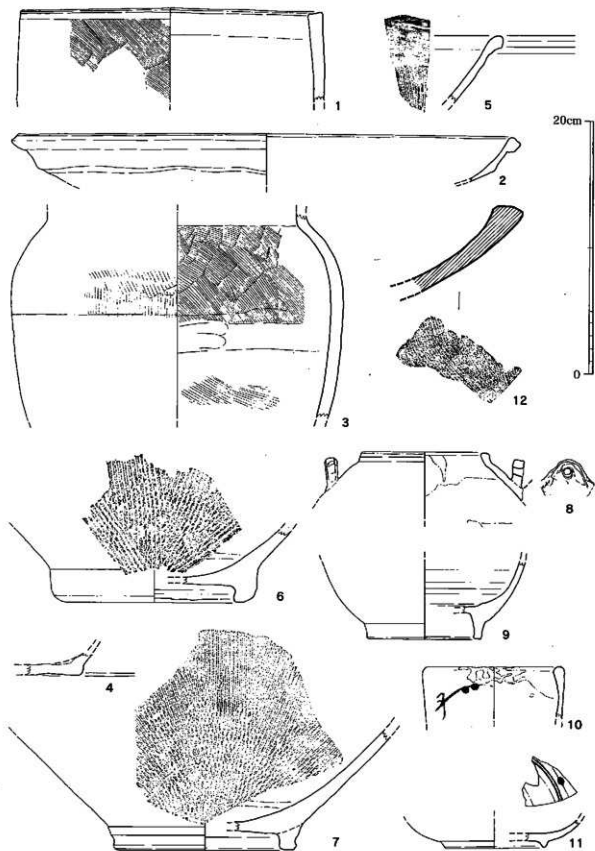
土師質土器(1・2) 1は小型の鉢の底部片で、外面は細かいハケ、内面は器面が剥落しており、調整不明で、押さえのみ確認できる。外面は煤が付着し、内面が変色なしに器面が摩滅していることから、煮炊きではないが煮沸使用したものといえる。2は焙烙の口縁部で、外面の口縁下は板状工具での押さえ、内面口縁下は目の細かいハケ調整。外面は煤が付着して淡黒灰色、内面は黄灰色を呈する。

瓦質土器(3・4) 3は小型の鉢の口縁部片で、火鉢の可能性が高い。胎土は橙褐色の土師質土器だが、器面が燻されて内外灰黒色を呈する。外面と口唇部は丁寧に磨かれており、光沢をもつ。器面が黒いため金雲母が目立つ。筑後市の板東寺焼系であろうか。4は鉢か火鉢の底部であろう。小片のため反転復元できないが、底径30cm前後である。外底は摩滅しており、接地していたと思われる。内外、暗黒灰色を呈する。

播鉢(5) 5は内外に鉄軸が厚くかかっているが、口唇部は灰かぶり。小片のため摺目の単位は不明。胎はやや軟質で、粒子を多く含む。肥前系か。

陶器(6) 6は半胴壺の胴部片で、外面は白化粧の上に鉄絵と緑釉の斑があることから、弓野焼系二彩であろう。胎は硬質で、にぶい淡灰褐色を呈する。

染付(7・8) 7は低く厚い高台と立ち上がりの角度、内面の文様と見込みの二重界線から、1750～1810年代の波佐見V-2期の小皿である。8は呉須で描かれた雪の輪文で、法量・器形から



第14图 1号井戸出土遺物実測図 (1/3)

1750～70年代の波佐見V-2期の中碗と思われる。

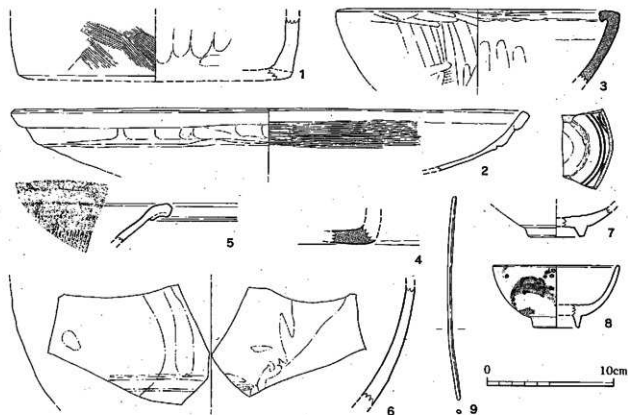
銅製品(9) 径3mmの不明棒状製品であり、先端は断ち切られている。やや湾曲しているが、本来は直線であっただろう。このほか、寛永通宝が1枚出土していたが整理中に紛失してしまった。

3号井戸 (図版9-3・4、第13図)

II区の南端に検出された長軸406cm、短軸320cmを測る大型の井戸で、1・2号井戸同様、検出面から約80cmで粗砂層に達すると激しい湧水のため、壁が崩落し人力では掘り下げられなくなる。重機で、掘削してみたところ、検出面から約3.2mで床面に達し、中央に桶が掘り込んで設置されていた。桶は下半部しか残っておらず、上位は抜き取られていた。このことから、本来桶を井筒とする井戸であっただろう。桶は取り上げず、現場で探寸したところ、厚さ3cmの側板を1cm幅の竹ひごのタガで下位と中位の2箇所留めていた。底板は厚さ2cm、幅12cmの板の間に木釘を差し込んだ径88cmの円板である。

上位に遺物が集中していたが、そこで見られた唐津系の甕の口縁部と同一個体と見られる底部片がこの桶の中に入っていた。このことから、桶の上半部を抜き取ったあとに肥前系の甕を廃棄したものと思われる。

本遺構の出土遺物は井戸の廃棄年代を指している。端反碗や端反形杯から19c第4四半期を中心と



第15図 2号井戸出土遺物実測図 (1/3)

し、20c第1四半期に見られる器種がないことと、明治30年代から流行する銅版転写染付や大正時代に流行する多色色絵の子供茶碗の存在から、20c初頭（明治30～40年代）には廃棄されている。

出土遺物（図版11・3・12、第16・17図）

陶器（1～7） 1はほぼ完形の駅茶瓶で、ロクロ成形であることから野間焼か。外面灰釉で胴下位から底部は無釉。鉄釉で「くろめ」と書かれており、久留米製で販売されていたことがわかる。2も口縁部の小片だが、吊手と口径から駅茶瓶と考えられ、失われている下位は壺形を呈するものと思われる。口縁部に吊手のつくタイプはわずかながら東京都汐留遺跡¹²に見ることができる。ロクロ成形であることから野間焼か。低火度の透明釉で、釉薬は福岡市古塚本町遺跡¹³で出土した駅茶瓶に類似しており、黄白色を呈する。胎は軟質の黄灰白色で、混人物なし。3は白化粧の上に外面と内面口縁部に青緑色の釉をかけるいわゆる青土瓶で、注口穴が破損している。肥前系か。4は土瓶の底部であろう。外底は火にかけられたため煤がついて灰黒色に変色している。内面には暗赤茶色の鉄釉がかかっており、見込みには外面にかけたと思われる白化粧土や銅緑釉が斑状に付着している。肥前系か。5は外底部が無釉、胴下位は薬灰釉で内面は褐釉がかかる。胎は暗灰色で、堅緻である。小型器種だが小片のため特定できない。肥前系か。6は肥前系の大甕で、ほぼ完形に復元したが、実際は1/6程度が残っている程度。墨書や記号等は見られない。

染付（7～9） 7は壺反形杯で、酸化コバルトの銅版転写により古典文学的一幕をモチーフとしているが、半分が欠損しているため全容はわからない。銅版の繋ぎ目は文様がない。畳付は釉剥ぎ。8は長筒形湯呑みで、型紙刷りによる花文と樹木文が描かれている。陶胎であることから波佐見産だろう。大牟田市三池集治監跡¹⁴の建物1貯水槽からの出土品に類例がある。9はほぼ完形の壺反碗で見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、畳付も釉剥ぎ。型紙刷り（コバルト）による花文で、型紙の重ね部分は上下とも文様が刷り出されている。

色絵碗（10） 瀬戸・美濃系の碗で、銅版転写による烏帽子・ダルマ・山子などの吉祥文の縁取りに赤・緑・黄・黒色の四色で上絵付けている。文様の内容と容量から子供茶碗であろう。口紅のほか胴下位にも赤の界線がある。畳付は釉剥ぎ。福岡市吉塚本町遺跡¹⁵2次調査に同一品があり、本遺跡出土品の欠損部に木馬のモチーフが入っている。

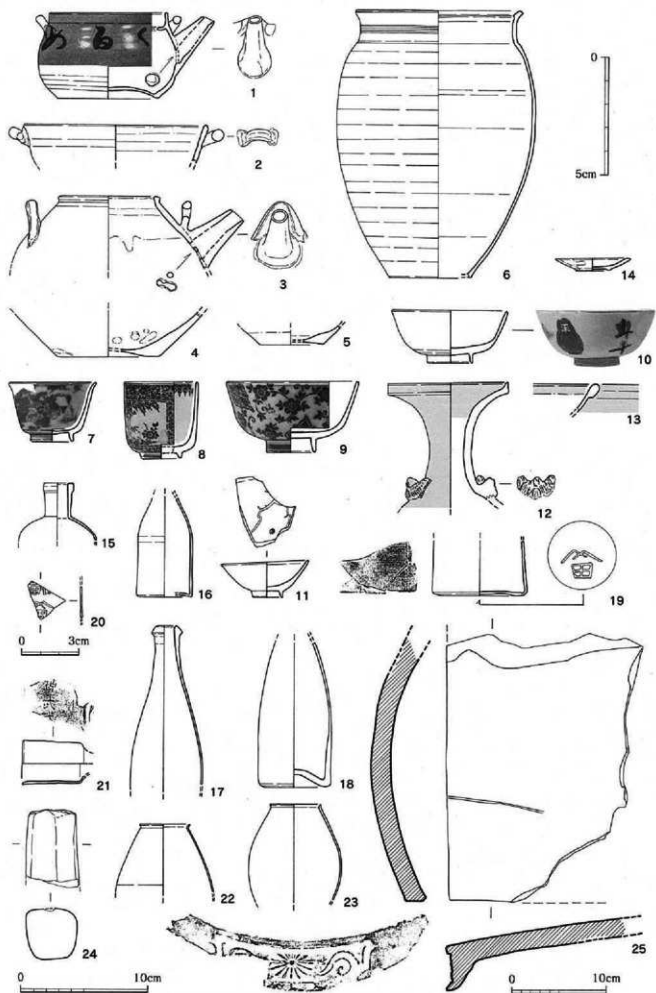
薄手小杯（11） 器壁はやや厚いが、見込みに彩色による文様を描いていることから、薄手杯の1つであろう。1箇所朱による文様を除いては、彩色が剥落しており、痕跡しか残っていない。何のモチーフかはわからない。肥前系。

陶器（12） 12は鉢の口縁部で、外面と内面の口縁下は鉄漿の上に灰釉がかかっており、口唇部のみワラ灰釉を上がけている。小片のため反転復元できないが、径22cmほどの片口か鉢に復元できる。胎は半磁器で、肥前系と思われる。

青磁（13） 13は盤口形仏花瓶で肩部に型押し成形の松実形の浮文を2つ貼り付けている。肥前系。

白磁（14） 14は紅猪口で、型造りだが外面に文様がなく、凹凸のみがあって未調整。釉も内面のみかかっており粗雑な造り。

ガラス製品（15～22） 15は型合わせによってつくられた瓶で、接合部に段差がある。気泡の少ない透明感のある褐色ガラス。16は小瓶で、ガラスが劣化してセルロイドのような質感と重量だが、気泡が入る透明ガラス。17・18は同一個体ではなく、同規格品である。一部が劣化しており、遺構内での遺存状態の差と思われる。口縁下には接合痕があり、体部とは別造りである。気泡の多い青



第16图 3号井戸出土土物実測图1 (6は1/16、20は1/2、25は1/4、他は1/3)

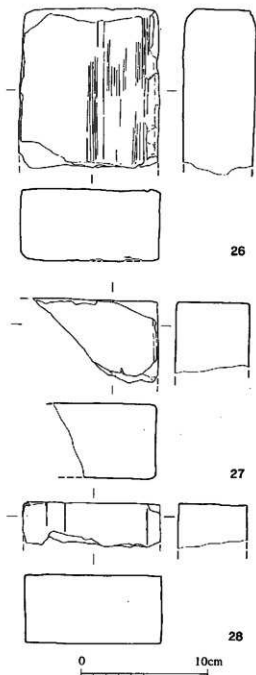
色ガラス。19は薬瓶で、底面に「田」字の屋号のマークが入っている。凹凸の多い青色ガラス。20は小片で器種不明だが、「田」字の屋号のマークが入っており、その上に残っている部分で「商録」と陽刻されており、「登録商標」の右書きの2文字であろう。気泡の多い青色ガラス。21は用途不明の製品で、残っている部分で「神武□」と陽刻されており、文字の方向から横位で使用するものらしい。先端は欠損ではなく、反りながら面取りして尖らせていることから、別の金属製の部品に接続するものではなかろうか。気泡の多い青色ガラス。22・23は豆ランプの「火屋」の先端部で、ガラスが劣化してセルロイドのような質感になっている。22は気泡が少なく透明感のある紫褐色ガラス。23は気泡の少ない透明ガラス。

土製品 (24) 土師質の方柱状土製品である。支脚に似ているが2次加熱を受けた痕跡がない。

側面の各面は丁寧にナデられており、面と面の間は丸みを持たせている。上面は押さえの痕跡が残る。色調は橙褐色を呈する。

軒椽瓦 (25) 白灰色から灰黒色を呈する。瓦当文は中央に菊花文、両側に唐草文を配しており、同じ瓦当文を久留米市石丸遺跡第6次調査で見ることができる。下面は火を受けたように斑状に剥離している。胎土は混入物少なく、精良。

レンガ (26~28) 26・27は橙褐色で、やや軟質。28は赤茶褐色で硬質。欠損しているため、いずれも小口部みの規格がわかる。26・27は幅10.9cm×厚さ5.6cmで作業局形、28は幅10.6cm×厚さ5.3cmで並形にあたる。



第17図 3号井戸出土遺物実測図2 (1/3)

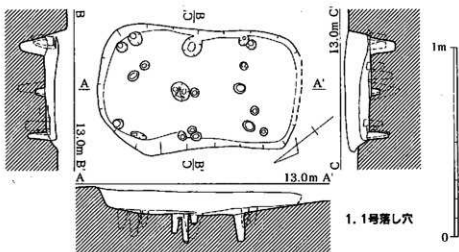
3) 落し穴遺構

1号落し穴 (図版8-3、第18図)

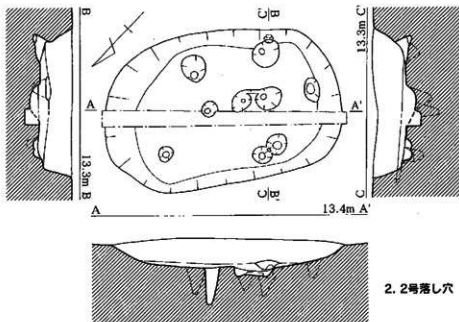
I区の北東部で検出された。長軸108cm、短軸70cmの長方形プランで、径6~9cmの大型の杭痕が中央に2本と、南北両側と西壁際に径4~9cmの小型の杭痕が18本ランダムにあり、全部で20本の杭痕を確認した。杭痕は底面からほぼ真下に下がっており、先端はやや細い。深さは中央の2本が15cmと深く、それ以外は5~11cmで浅い。埋土は黒色土で、遺物は出土していない。

2号落し穴 (図版
8-4、第18図)

Ⅱ区の東端部で検出された。大きく削平されており、底部付近の規模で、長軸124cm、短軸82cmを測る。隅円長方形プランで、床面には全部で10本の杭を確認した。径14cmの大型の杭痕が中央に集中しており、南北両側に径8~13cmの小型の杭痕がある。杭痕は1本を除き底面からはほぼ真下に刺さっており、先端はやや細い。深さは中央の3本が14~18cmと深く、それ以外は6~14cmで浅い。埋土は黒色土で、遺物は出土していない。



1. 1号落し穴



2. 2号落し穴

第18図 落し穴実測図 (1/20)

4) 溝状遺構

1号溝状遺構 (図版10-1・2、第12・19図)

Ⅲ区の南にやや湾曲しながら、南東から北西に走るもので、この溝から南の遺構面は緩やかに下がっており、南端はグライ化している。幅は広いところで1.8 mあり、土層から掘り直しがあったとわかる。床面はほぼ平坦で、深いところで14cmを測る。出土遺物はなく、時期不明。

2号溝状遺構 (図版7-2・10-3、第12・19図)

Ⅲ区の南側に直線的に北東から南西に走り、3号溝状遺構と併走しており、1号溝状遺構とはほぼ垂直方向になる。幅はほぼ均一で広いところで約50cm、深さは14cm程度の小溝で、床面はやや南西に向かって下がっている。出土遺物はなく、時期不明。

3号溝状遺構 (図版7-2、第12図)

Ⅲ区の南側にあり、北東から南西に走るが、削平のため端部と中央が切れている。2号溝状遺構と併走しており、1号溝状遺構とはほぼ垂直方向になる。幅はほぼ均一で広いところで約30cm、深さは約40cm程度の小溝で、床面はほぼ平坦。出土遺物はなく、時期不明。

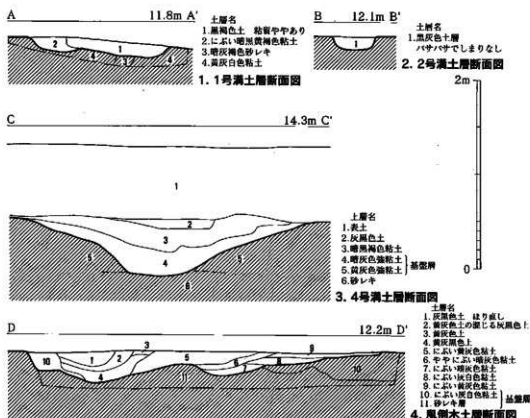
4号溝状遺構 (図版7-2・10-4、第12・19図)

西区の北側にやや湾曲して東西に走る溝で、1号溝状遺構にはほぼ併走している。壁の立ち上がりはやや緩やかで、床面は東から西に下がっている。深いところで45cmほどある。幅は東部がやや広く約270cmあった。出土遺物は見られず、時期は不明。

5) その他の遺構

風倒木痕 (図版10-5、第12・19図)

多くの風倒木痕が検出され、基盤層土壌以外の埋土部分を掘り下げたが、いずれの風倒木痕からも遺物が出土せず、溝状遺構に切られることから、1基の土層のみ参考に掲載する。ほとんどの風倒木痕が北から北西方向に倒れていた。



第19図 1・2・4号溝状遺構、風倒木痕土層実測図 (1/40)

6) まとめ

西牟田北原遺跡からは土坑2基、井戸3基、落し穴2基、溝状遺構4条が検出された。これらの遺構・遺物のうち、落し穴遺構と3号井戸から出土した駅茶瓶について若下の考察を加える。

落し穴遺構について

I・II区から落し穴が2基検出された。どちらも底に逆杭を押し込んだと考えられるピットが多数あり、法量と同じであることから第21図の方向に続く一連の落し穴列の一部であると考えられる。このような形態の落し穴は縄文早期に属すると見られている。

旧三瀨町内では発掘調査件数自体は少ないものの、落し穴遺構は高い確率で検出されている。この現象はこの地域を巨視的に見ることで理解できる。

旧三瀨町を中心に、筑後劇南岸の久留米市（現）南西部・筑後市・大川市・八女市西部・大木町を対象として、落し穴遺構の発見された地点と落し穴遺構以外の縄文時代早期の遺跡が発見された地点を分けて第20図のように落としてみた。

地形的にはいずれの落し穴遺構も台地先端部の低台地にあり、台地上に占地する他の早期の遺跡とは距離を置いている。狩猟エリアが集落から離れているのは当然である。しかしながら、本地域では、久留米市（現）南西部では落し穴遺構が、その他の早期遺跡から5～8km離れて密集しており、筑後・八女市域では500m～1kmに分散するという傾向を見ることできる。これはなぜなのだろうか。

筑後市の西に位置する大木町では発掘調査が行われていないためとも考えられるが、それだけではないだろう。落し穴遺構が集中し、その他の早期遺跡が存在しない地点は地形的には低台地にあたる。この低台地の範囲を狩猟エリアとすると、第20図の破線の範囲が想定できる。この想定では筑後市西部から大木町一帯には、狩猟エリアはわずかしかなないのである。

同地域のおほとんどを占めるのは低地でありその基盤層は強粘質土である。現在はその基盤を利用してクレークが縦横に走っているが、このクレークがない中世以前は泥湿地が広がっていたと考えられる。地形と地質の違いは生態系の差であり、落し穴掘削対象の動物も少なかったであろう。また、強粘質土の基盤層を掘削すると、その排土はブロックとなって落し穴掘削土の処理が困難になる。また、掘削中に湧水することがしばしばあり、落し穴を掘ること自体適さない地質である。そのため、筑後・八女市域の落し穴掘削は集落に近い低台地で行っていたのではないだろうか。

これに対して、久留米市南西部は集落エリアから離れた場所に広大な低台地が広がっている。ここでは縄文時代全般にわたって集落が存在しておらず、狩猟エリアを保護するための規制が働いていたものと思われる。

本遺跡を見てみると、低台地の広がり方から、八女丘陵先端部に立地する集落の狩猟エリアに属すると思われる。そのため、三瀨町域では落し穴遺構が多く検出されるのである。現在のところ蔵敷・西牟田地区では縄文早期集落が未発見であるが、将来的な発見が想定される。今後の調査の進展に期待したい。



縄文早期遺跡一覧

落し穴遺構検出遺跡

久留米市

- 1 遺構遺跡
- 2 寛心遺跡
- 3 今井・坂本・野間塚遺跡
- 4 念仏塚遺跡A地点
- 5 中井遺跡
- 6 女塚・野間塚
- 7 穴口遺跡
- 8 任島野遺跡
- 9 山ノ内遺跡第1次調査
- 10 念丸遺跡
- 11 草池遺跡
- 12 筑後川河原跡第200次
- 13 中津遺跡
- 14 瀬手平出遺跡
- 15 西牟田前寺遺跡
- 16 高牟田北原遺跡

広川町

- 17 北の森遺跡
- 18 勢ヶ山遺跡
- 19 嶋崎遺跡
- 20 赤坂遺跡
- 21 太田地区遺跡群松原遺跡D地区
- 22 太田地区遺跡群松原遺跡E地区
- 23 太田地区遺跡群松原遺跡F地区
- 24 平出遺跡

筑後市

- 1編 文庫1
- 1編 文庫2
- 95編 文庫2-3
- 2編 文庫4
- 12編 文庫5
- 5編 文庫3-6
- 17編 文庫5
- 24編 文庫5
- 1編 文庫7
- 1編 文庫8
- 1編 文庫9
- 1編 文庫10
- 1編 文庫11
- 1編 文庫12
- 17編 文庫13
- 2編 4号

八女市

- 38 京西工業団地内遺跡
- 39 上藤遺跡
- 34編 文庫15
- 41 駒野地野田跡1地点
- 42 山ノ上遺跡
- 43 蓮子遺跡
- 44 徳川の辻遺跡2次調査
- 45 船池遺跡

久留米市

- 46 上藤遺跡
- 47 安国寺1~3次
- 安国寺4次
- 安国寺遺跡6次
- 48 吹上遺跡
- 49 へびノ木遺跡10次
- 50 横道遺跡6-9次
- 51 幸ノ上芝原遺跡第5次
- 52 大井井遺跡
- 53 甲塚遺跡
- 54 神道遺跡2-3次
- 7編 文庫19
- 4編 文庫20
- 1編 文庫21
- 1編 文庫22
- 3編 文庫22
- 1編 文庫23
- 1編 文庫24
- 1編 文庫23
- 1編 文庫25
- 1編 文庫26
- 2編 文庫26
- 2編 文庫27
- 1編 文庫28
- 18編 文庫29
- 4編 文庫30

広川町

- 85 広川中津遺跡

筑後市

- 56 山ノ内野遺跡
- 57 真山遺跡
- 58 藤田ヶ池遺跡第1次調査
- 59 藤田ヶ池遺跡第1-2次調査
- 60 鶴田野田遺跡
- 61 野井山田遺跡
- 62 久那中野遺跡1調査
- 63 久那中野遺跡2次
- 64 志留田遺跡

八女市

- 65 幸ノ西遺跡
- 66 大井井遺跡2次調査
- 67 池上遺跡
- 68 下山遺跡
- 69 緑毛遺跡1地点
- 70 立野・穴出遺跡1~3地点

- 文庫39
- 文庫40
- 文庫41
- 文庫42
- 文庫43
- 文庫44
- 文庫45
- 文庫46
- 文庫47
- 文庫48

- 文庫49

- 文庫50
- 文庫51
- 文庫52
- 文庫53
- 文庫52
- 文庫52
- 文庫54
- 文庫50
- 文庫30
- 文庫27

- 文庫55
- 文庫56
- 文庫57
- 文庫58
- 文庫58

第20図 久留米市西南部・筑後市・八女市域の落し穴、縄文早期遺跡分布図 (1/100,000)

駅茶瓶（汽車土瓶）

3号井戸から駅茶瓶が出土している。「汽車土瓶」の名称をとることの方が多く、専用容器化するにつれて土瓶から瓶形に変化していくことから、ここでは総称して「駅茶瓶」という用語を用いたい。駅茶瓶は鉄道駅構内で販売された駅売弁当に伴うお茶販売に供せられた陶磁器製容器であり、明治20年代前半には販売が行われるようになったようである。小型土瓶型のものは土瓶・蓋・湯呑から構成されており、湯飲みを茶瓶の蓋に倒立してセットにしていた。土瓶胴部には販売店や販売駅名が書かれているものも多い。

本遺跡出土品は「くるめ」と鉄軸で筆描されており、旧九州鉄道久留米駅で販売されていたものであろう。旧九州鉄道は明治21（1888）年に博多—久留米間を先行して開業しており、それ以降のものであるといえる。

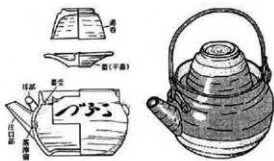
駅茶瓶は全国各地に生産地が知られているが、福岡県内の駅茶瓶については吉塚本町遺跡に詳しい。同遺跡の報告書によると、北部九州の駅茶瓶の生産地としては鳥栖市（実際には北茂安町）の白石焼と野間焼（福岡市南区皿山）が有名で、白石焼は鳥栖焼、野間焼は博多駅を中心に販売していたようだ。白石焼は型作りで、野間焼がロクロ成形とされている。野間焼の駅茶瓶は当初素焼きの徳利型であり、その後、土瓶型に釉薬をかけてやや高い温度で焼くようになったとある。本遺跡出土品はロクロ成形で、灰軸がかかっており、硬質の陶器であることから、出土品は野間焼の新しいタイプであろう。

駅茶瓶は鉄道関連施設から集中して出土する傾向がある。駅茶瓶が大量に出土した東京都港区汐留遺跡は「新橋停車場跡」であり、吉塚本町遺跡の近代遺構は「旧九州鉄道吉塚操車場跡」関連の遺構と見られている。このことから、内容物が消費された駅茶瓶は、回収されるか、駅構内に集められ、それらを一括して廃棄していたと想定されている。

本遺跡の場合は駅から離れているが、Ⅱ区の近代の建物跡は線路に併置している。当地は鉄道敷設までは荒地であり、宅地を一軒だけあえて鉄道に隣接して作るのは不自然である。

また、井戸からは瓦が少量出土しているが、周辺に宅地はなく、当地に瓦葺建物が存在していたと考えられる。

出土物から見て建物の存続期間は短く、通常の宅地であれば多く出土するはずの小皿がなく、湯飲みや土瓶、ランプが目立つことを考えあわせると、この建物は九州鉄道関連の施設であったと考えられる。



第21図 駅茶瓶の構造と使用（販売）形態
『季刊考古学』第72号2000より



福岡市吉塚本町遺跡出土駅茶瓶
『吉塚本町遺跡』1992より

出土遺物から、この3号井戸は20c初頭（明治30～40年代）の廃絶である。旧九州鉄道は明治21（1888）年に博多-久留米間が開通した後、久留米-高瀬（玉名）間は明治24（1891）年4月に開通しているので、久留米駅以南は明治21～23年に敷設されたことになり、廃絶以前に建設された建物と見れば年代的には符合する。（第22図）

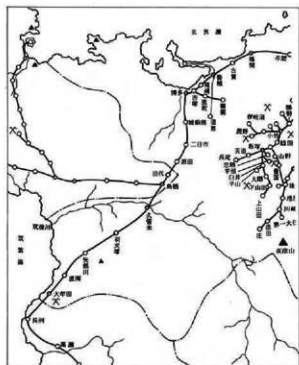
西牟田大立遺跡Ⅰ区西側の「干間溝」に架けられたJR鹿児島本線のレンガ造りの大立橋がある。イギリス積みのアーチ式橋梁で、出土したレンガはこの建築資材であった可能性もある。

本遺跡出土のレンガには並形と作業局形の2種類があるが、作業局形は明治30年に鉄道作業所が規定した規格である。並形は明治末には減少していくが、補修用に生産量を減らしながらも存続していくようだ。作業局形レンガの存在から3号井戸の廃絶年代は明治30年代でも早い段階と考えられる。このことから、Ⅱ区の井戸や攪乱建物は九州鉄道久留米-高瀬（玉名）区間建設に伴う施設であり、開通後も明治30年代頃までは存続したのち廃絶したものと思われる。

大立橋のようなレンガ造橋梁は現在のJR線にいくつか残っている。そのうち装飾性に富んだ下に掲載した北九州市茶屋町橋梁は市指定文化財に、構造的にユニークな筑紫野市城山三連橋梁は登録文化財になっている。

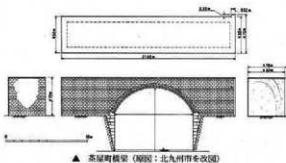


旧九州鉄道大立橋（南東から）



▲九州鉄道路線図（明治36年）

第22図 明治36年の九州鉄道路線
『福岡県の近代化遺産』1993より改変



▲茶屋町橋梁（断面：北九州市茶屋町改図）



▲茶屋町橋梁（裏面、1992年撮影）

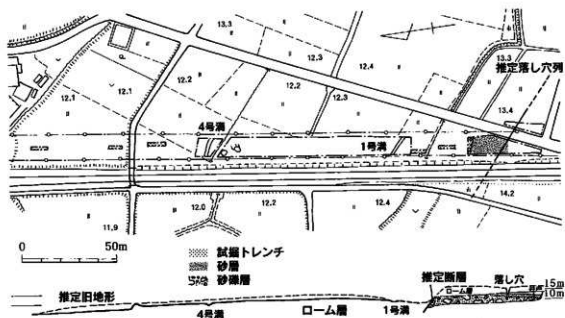
北九州市指定史跡「旧九州鉄道茶屋橋梁」
『福岡県の近代化遺産』1993より

最後に、遺跡周辺の試掘調査結果を含めて、西牟田北原遺跡周辺の地形についてふれておきたい。本遺跡北側は試掘調査により、すでに大きく削平されており、遺構・遺物を確認することができなかった。4号溝状遺構の北岸は緩やかに立ち上がっており、本来の地形はその傾きからするとまだ高いはずである。反対に、Ⅲ区1号溝状遺構の南側は緩やかに下がっており、基盤層がグライ化していた。

ところが、その南に位置するⅡ区の北側は1mほど高い位置で砂礫層が出ており、さらに、2号落し穴周辺から南に行くにつれて、砂礫層は砂層、ローム層へと変わっていった。砂礫層上には本来砂層・ローム層が順に堆積しているはずであるが、検出面は平坦であるので、Ⅱ区の地形は南に傾いていたといえる。Ⅱ区の南側に広がるローム層と、Ⅲ区南側のグライ化したローム層が同質のものであることから、Ⅱ区とⅢ区間の段差は段丘崖であるといえよう。

広大な段丘面は縄文時代の良好な狩猟エリアとなり、段丘面が斜めに傾斜していたために段丘崖の下に小河川が生じ、古墳時代になるとそこに溝が掘って、耕地開発が始まったのであろう。しかし、河岸段丘であるために川床が深く、洪水の際には地下水位が下がるため水不足になりやすい地形でもある。それを打開するために、江戸時代に入って千間溝が掘られたのである。

今回の調査では、本地域の地形・地質の特徴を把握することができた。土地利用の歴史には、その土地の地形や地質が深く関係しており、遺構の在り方を理解する一助となるものと思われる。



第23図 西牟田北原遺跡旧地形復原図 (1/2,000)

注

1. 大石直樹1996『久留米城下町両替町遺跡』久留米市文化財調査報告書第116集 久留米市教育委員会
2. 右田乙次郎1973『水田の十編』筑後市教育委員会 筑後市郷土史研究会
3. 福岡敏一1976『砂留遺跡(第6分冊)』東京都埋蔵文化財センター調査報告第125集 東京都埋蔵文化財センター
4. 井上裕弘1992『古塚本町遺跡』福岡県文化財調査報告書第97集 福岡県教育委員会
5. 山田元樹1995『三池染治遺跡』大牟田市文化財調査報告書第46集 大牟田市教育委員会
6. 前掲註4

7. 神保公久2001『平成12年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第175集 久留米市教育委員会
8. 落し穴遺構の検出地点でも早期の土器片が少量発見されることがあるが、集落の存在を想定できるほどの量でなく、落し穴遺構に伴うか関連するものとして一括した。
9. 育環エリアは低台地だけでなく、集落の後背丘陵斜面にも存在する。実際に、落し穴遺構も比高差の大きい斜面でも発見されているが、そうした地形には他の時代も含めて落し穴以外の遺構が作られることが少ないため、遺跡として確認されにくく、久留米西南部の高良山丘陵、筑後・八女市域の八女丘陵でもほとんど発見されていない。そこでここでは丘陵斜面の育環エリアには言及しない。
10. 前掲註4

参考文献

- 水ノ江利可他2004『第14回 九州縄文研究会鹿児島県分大会 九州における縄文時代のおとし穴遺構』九州縄文研究会・南九州縄文研究会
- 富永直樹1992『第3巻 九州のおとし穴遺構について』『安武地区遺跡群Ⅶ』久留米市文化財調査報告書第72集 久留米市教育委員会
- 高橋信武1994『九州のおとし穴の発掘』『先史学・考古学論叢』龍州考古学会
- 岡見 徹2000『汽車土器』『季刊考古』第72号 嵐山閣
- 進村真之2003『志保宮坂遺跡・鶴三給七浦遺跡』一般国道201号飯塚内田川バイパス関係歴史文化財調査報告第2集 福岡県教育委員会
- 児玉真一1993『福岡県の近代化遺産-日本近代化遺産総合調査報告-』福岡県文化財調査報告書第113集 福岡県教育委員会

落し穴検出遺跡・縄文早期遺跡一覧 引用文献

1. 大石嶺樹・近澤麻治1991『道蔵遺跡』久留米市文化財調査報告書第68集 久留米市教育委員会
2. 白木守1997『安武地区遺跡群Ⅰ』久留米市文化財調査報告書第128集 久留米市教育委員会
3. 白木守1994『安武地区遺跡群Ⅱ』『久留米市史』第12巻資料編考古 久留米市史編さん委員会
4. 富永直樹1992『安武地区遺跡群Ⅶ』久留米市文化財調査報告書第72集 久留米市教育委員会
5. 萩原裕男・富永直樹1989『安武地区遺跡群Ⅱ』久留米市文化財調査報告書第69集 久留米市教育委員会
6. 白木守1995『安武地区遺跡群Ⅹ』久留米市文化財調査報告書第99集 久留米市教育委員会
7. 白木守2002『平成13年度 久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第183集 久留米市教育委員会
8. 園井正徳・近澤麻治2003『金丸遺跡Ⅲ』久留米市文化財調査報告書第191集 久留米市教育委員会
9. 大石嶺・小沢太郎1998『光・藤光遺跡群Ⅱ』久留米市文化財調査報告書第145集 久留米市教育委員会
10. 神保公久2005『筑後国府跡 園分寺跡・平成16年度発掘調査報告-概要報告-』久留米市文化財調査報告書第210集 久留米市教育委員会
11. 中川智賢子1995『中原遺跡』三瀬町文化財調査報告書第3集 三瀬町教育委員会
12. 伊崎俊秋1993『選手牟出遺跡』三瀬町文化財調査報告書第2集 三瀬町教育委員会
13. 塚本映子2001『西中出清寺遺跡』三瀬町文化財調査報告書第7集 三瀬町教育委員会
14. 佐々木隆彦1993『北の前遺跡Ⅱ』広川町文化財調査報告書第16集 広川町教育委員会
15. 福岡県教育委員会2000『福岡県歴史文化財発掘調査年報-平成9年度-』福岡県教育委員会
16. 尾崎源太郎1999『広川町内遺跡群Ⅰ』広川町文化財調査報告書第16集 広川町教育委員会
17. 尾崎源太郎1998『筑後国府跡事業広川西部地区内埋蔵文化財調査概報Ⅱ』広川町文化財調査報告書第15集 広川町教育委員会
18. 尾崎源太郎2000『広川町内遺跡群Ⅱ』広川町文化財調査報告書第17集 広川町教育委員会
19. 川辺昭人1988『伊藤遺跡』筑後市文化財調査報告書第5集 筑後市教育委員会
20. 佐々木隆彦1990『蔵敷遺跡群』筑後市文化財調査報告書第6集 筑後市教育委員会
21. 上村英士1999『前津ノ玉遺跡Ⅱ』筑後市文化財調査報告書第22集 筑後市教育委員会
22. 上村英士2004『前津ノ玉遺跡Ⅲ』筑後市文化財調査報告書第55集 筑後市教育委員会
23. 小林秀作2001『筑後市内遺跡群Ⅱ』筑後市文化財調査報告書第33集 筑後市教育委員会
24. 小林秀作2000『筑後西部第2地区遺跡群(Ⅱ)』筑後市文化財調査報告書第29集 筑後市教育委員会
25. 立石真二2001『筑後西部第2地区遺跡群(Ⅳ)』筑後市文化財調査報告書第34集 筑後市教育委員会
26. 永見秀徳2003『筑後西部第2地区遺跡群(Ⅵ)』筑後市文化財調査報告書第51集 筑後市教育委員会
27. 立石真二2000『筑後西部第2地区遺跡群(Ⅲ)』筑後市文化財調査報告書第27集 筑後市教育委員会
28. 永見秀徳1994『筑後東部地区遺跡群Ⅰ』筑後市文化財調査報告書第11集 筑後市教育委員会
29. 永見秀徳1995『筑後東部地区遺跡群Ⅱ』筑後市文化財調査報告書第12集 筑後市教育委員会
30. 永見秀徳・小林秀作2001『筑後東部地区遺跡群Ⅴ』筑後市文化財調査報告書第35集 筑後市教育委員会
31. 大塚恵治1993『聖四工業団内遺跡Ⅰ』八女市文化財調査報告書第27集 八女市教育委員会
32. 赤崎敏男1991『上柳遺跡』八女市文化財調査報告書第21集 八女市教育委員会
33. 大塚恵治2000『川林遺跡(2次調査)』八女市文化財調査報告書第58集 八女市教育委員会
34. 大塚恵治1996『筑後農村活性化埋蔵文化財調査概報Ⅱ』八女市文化財調査報告書第42集 八女市教育委員会
35. 福岡県教育委員会2003『福岡県歴史文化財発掘調査年報 平成13年度-』福岡県教育委員会
36. 赤崎敏男1997『八女東部地区埋蔵文化財調査概報3』八女市文化財調査報告書第47集 八女市教育委員会
37. 大塚恵治1995『際雲村活性化埋蔵文化財調査概報Ⅱ』八女市文化財調査報告書第38集 八女市教育委員会
38. 大塚恵治1994『融治屋遺跡』八女市文化財調査報告書第32集 八女市教育委員会
39. 久留米市教育委員会1979『筑後国府跡昭和51年・52・53年度発掘調査概報』久留米市文化財調査報告書第20集 久留米市教育委員会
40. 萩原裕男・立石真二1984『東部土地区内整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第3集』久留米市文化財調査報告書第39集 久留米市教育委員会

41. 櫻井康治1993『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第12集』久留米市文化財調査報告書第83集 久留米市教育委員会
42. 富永直樹1995『安国寺遺跡第5次調査』久留米市文化財調査報告書第108集 久留米市教育委員会
43. 園井正隆1996『久留米市埋蔵文化財調査集報(1)』久留米市文化財調査報告書第47集 久留米市教育委員会
44. 白木守2000『平成11年度 久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第161集 久留米市教育委員会
45. 近澤淳治2001『横道遺跡Ⅱ』久留米市文化財調査報告書第173集 久留米市教育委員会
46. 白木守2002『平成13年度 久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第183集 久留米市教育委員会
47. 西尾一郎1981『第一編 第2章 縄文時代』『久留米市史』第1巻 久留米市史編さん委員会
48. 富永直樹1983『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第2集』久留米市文化財調査報告書第36集 久留米市教育委員会
49. 嗣島邦弘1970『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』I 福岡県教育委員会
50. 小林勇作2004『山ノ井南野遺跡』筑後市文化財調査報告書第56集 筑後市教育委員会
51. 筑後市教育委員会1996『裏山遺跡』筑後市教育委員会
52. 柴田 剛2002『筑後東部地区遺跡群Ⅳ』筑後市文化財調査報告書第38集 筑後市教育委員会
53. 上村英士2001『筑後東部地区遺跡群Ⅴ』筑後市文化財調査報告書第36集 筑後市教育委員会
54. 小林勇作2004『筑後東部地区遺跡群Ⅴ』筑後市文化財調査報告書第58集 筑後市教育委員会
55. 大塚恵治1994『寺ノ西遺跡』八女市文化財調査報告書第30集 八女市教育委員会
56. 赤崎敏男1992『八女南部地区照宮園場整備事業地内埋蔵文化財調査概報3』八女市文化財調査報告書第23集 八女市教育委員会
57. 八女市史編纂専門委員会1992『八女市史』上巻 八女市
58. 大塚恵治1995『照宮園場活性化際地整備事業地内埋蔵文化財調査概報Ⅱ』八女市文化財調査報告書第38集 八女市教育委員会



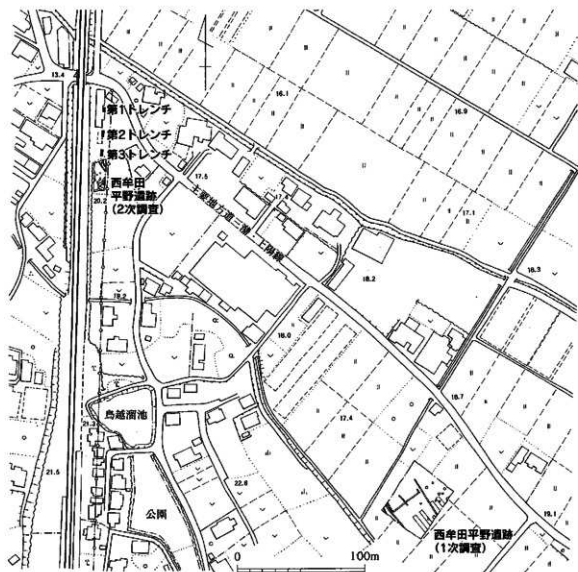
調査に参加された作業員の皆さん

3. 西牟田平野遺跡（2次調査）

1) 遺跡の概要

本遺跡は三浦郡三浦町（現久留米市三浦町）大字西牟田字平野6168-1に所在する。平成16（2004）年に三浦町教育委員会（現久留米市教育委員会）が、老人ホーム建設に先立ち西牟田平野遺跡を調査している。よって、本調査は西牟田平野遺跡2次調査である。

平成16（2004）年7月2日に実施した試掘調査で、当該地について遺構を確認した。このため、同年9月30日に鉄道・運輸機構九州新幹線建設局久留米鉄道建設所、文化財保護課で協議を行い、10月12日に発掘調査に着手した。10月18日から作業員による作業を開始、11月8日には作業を終えた。11月12日に重機による埋め戻しを行い、調査の全作業を完了した。



第24図 西牟田平野遺跡（2次調査）周辺地形図（1/3,000）

本遺跡の状況から、北側隣接地（大字西牟田6170-5の一部）にも遺構が広がると推測されたため、既存建物撤去後の平成17（2005）年4月6日に、久留米市教育委員会が試掘調査を実施した。本調査の必要はないとの結論が出されたが、本遺跡周辺の地形を知るために内容を紹介しておく。（第24図）3箇所にトレンチを設定し、南から順に番号を付している。建物建設のために対象地全体に100cm前後の盛土が行われている。

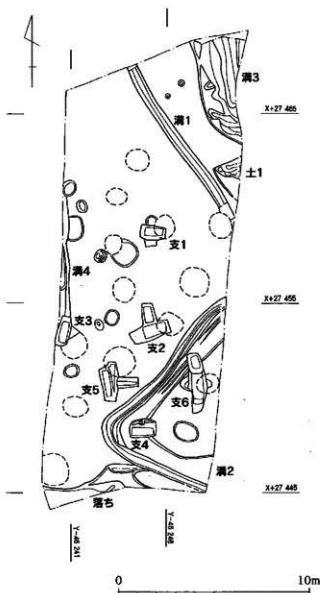
第1トレンチでは現地表から146cmの深さで地山（明灰黄色粘土）に達した。盛土下の土層状況は、本遺跡で3号溝状遺構とした遺構の埋土と同様で、同一の遺構と思われる。トレンチ底近くに粗砂が堆積しており、底面が筋状に凹凸していることから自然流路とみられる。このトレンチ内で自然流路の立ちあがりは認められず、遺物は出土しなかった。

第2トレンチでは盛土下に厚さ18cmの暗褐色土の堆積が見られ、これを除去後地山に達した。現地表から105cmの深さである。径10cm以下の小ピットが1～2個検出されたが、遺物は確認できなかった。

試掘対象地と本遺跡は八女古墳群が所在する丘陵から北西へ伸びる微高地の端部に位置し、県道三瀬上陽線の路面との比高差は約3mである。県道に向かって低くなる旧地形が捉えられるものと予測して第3トレンチを設定したが、現地表下120cmで地山に到達した。削平著しく、遺構、遺物とも確認できなかった。

現況では、試掘対象地が微高地の先端部のように見える。しかし、第3トレンチで確認した地山面は本遺跡の遺構面（標高16.20m）よりも40cm程度低く、県道を挟んだ北側の西牟田大立遺跡Ⅰ区の遺構面は標高15.50mである。

本遺跡を含めどの地点も削平されているが、緩やかな傾斜が認められるに過ぎず、西牟田大立遺跡Ⅰ区まで同一の微高地上に存することが確認された。



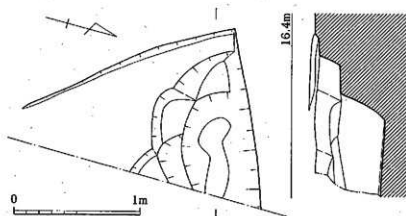
第25図 西牟田平野遺跡（2次調査）遺構配置図（1/200）

2) 遺構と遺物

1. 土坑

1号土坑 (図版15-2、
第24・26図)

調査区北東部に位置する。大部分が調査区外になり、全形は不明である。もっとも深い部分で0.55mを測る。埋土は黒褐色粘質土、暗灰色粘質土を中心とする。遺物は出土していない。

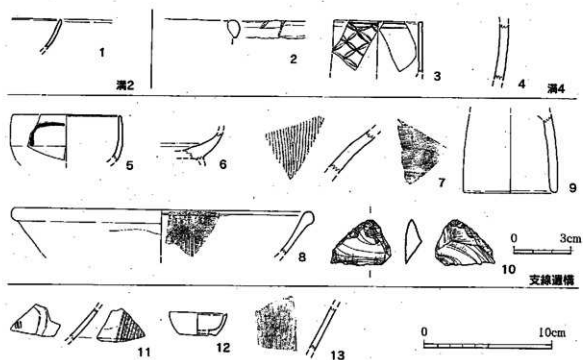


第26図 1号土坑実測図 (1/30)

2. 溝状遺構

1号溝状遺構 (図版13-1、第25図)

調査区北東部に位置する北西-南東方向の溝で、調査区外へのびる。幅0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は上層から黒色土、暗灰褐色粘質土である。遺物は出土していない。



第27図 出土土器・石器実測図 (10は1/2、その他は1/3)

2号溝状遺構 (図版13-1、第25図)

調査区南東部に位置する溝である。北東-南西方向から鉤型に南東へ折れ、両端とも調査区外へのびる。幅1.0~1.7mを測る。溝の東側はごく浅いが、西側幅0.3~0.5mの部分で最も深く、深さ0.2mを測る。埋土は黒色土である。図示した遺物の他に土師質土器小片、陶磁器小片が出土している。

出土遺物 (図版14-1、第27図1)

1は白磁のごく小片で、碗であろう。内外面とも施釉、残存部に文様はない。胎土は白色で緻密、釉はわずかに青みをおびた白色である。

3号溝状遺構 (図版13-1、第25・27図)

調査区北東隅に位置する。その大部分が調査区外になり幅は不明であるが、北西-南東方向にのびると思われる。深さは0.65mを測る。埋土は黒褐色粘質土、淡灰色粘質土、黄灰色砂質粘土を中心とし、底面近くに褐色粗砂が堆積している。埋土の状況から調査時には溝と判断していたが、前項で述べたように自然流路であろう。土師器小片が出土している。

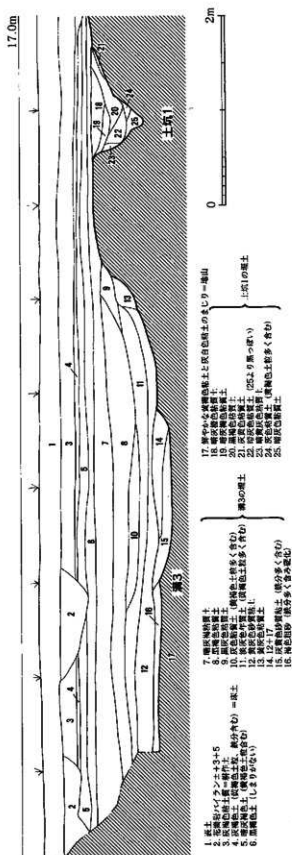
4号溝状遺構 (図版13-1、第25図)

調査区西壁の中央付近に位置する、南北方向の溝である。かろうじて東岸が調査区内にかかっているだけで、幅、深さとも不明である。埋土は黒色土である。図示した他に土師器小片が出土した。

出土遺物 (図版14-1、第27図2~4)

2は土師質土器で、鍋の口縁部であろう。玉縁状に成形した部分がはがれたものと思われる。小片のため口径は不明。摩滅しており、流れ込みと思われる。

3は染付の小碗。胎土は灰白色で緻密、



第28図 調査区東壁土層図 (1/40)

軸は青みをおびた灰色である。復元口径6.65cm。

4は陶器で、鉢あるいは壺であろうか。外面は回転ヘラ削り後に施軸。胎土は精良で、軸は褐色を呈する。

3. その他の遺構

支線遺構 (第25図)

全部で6基検出した。平面形は凸形、あるいは長方形で、深さは1.1～1.3mを測る。埋土は黄褐色粘質土、黄灰色粘質土、褐色砂、黒色土が混じりあっていた。

6号遺構を除き、10号ほどの太さの番線を巻いた丸太ないし角材が、遺構の長辺と平行に埋設されていた。出土した木材は松と思われ、丸太は殆ど腐食していなかった。番線は木材と直角方向へのび、その方向から、3基一組になっていたとみられる。

豊前市今市向野遺跡A・B地点¹¹に同様の遺構があり、木製送電線を支えるための支線の基礎と報告されている。

出土遺物 (図版14-2、第27図5～10)

5は染付で、小椀であろう。外面の下半を回転ヘラ削りしている。胎土は灰色で緻密、軸は灰色である。復元口径8.5cm。2号遺構出土。

6は磁器のごく小片で、小皿であろう。内外面、高台の内側に施軸するが、内底部は蛇の目に軸を掻き取る。胎土は灰白色でやや粗い。軸は、外面は黄褐色、内面と高台内側は白色である。5号遺構出土。7・8は擂鉢である。7は体部下半の破片であろう。土師質で、内外面ともごく薄く施軸している。2号遺構出土。8は口縁部の破片である。口縁端部を玉縁状に肥大させ、施軸する。軸は暗褐色で、一部垂れがみられる。復元口径23.4cm。3号遺構出土。

9は罫子である。復元口径は7.0cm。志免町志免鉱業所遺跡¹²に類例があり、高圧ビン罫子の一部と思われる。3号遺構出土。

10は黒曜石製の剥片石器である。長さ2.4cm、幅3.2cm、厚さ0.6cm、重さ4.0g。2号遺構出土。



5号支線遺構



3号支線遺構

4. その他の遺物 (図版14-3、第27図11~13)

他に植木を抜いた痕と思われる攪乱からもごく少量であるが、遺物が出土した。

11は同安窯系青磁碗の体部小片である。内面に櫛状の施文具で花文を、外面に粗い櫛目を施す。胎土は灰褐色で粗く、釉は淡青灰色である。

12は紅皿と思われる。歪んでおり、粗雑なつくりである。内外面とも施釉。胎土は白色でやや粗く、黒色粒がみられる。釉は白色である。復元口径4.6cm、器高1.7cm。

13は播鉢で、口縁部に近い部分である。焼き締めで、非常に硬質である。

3) おわりに

本遺跡で確認された遺構は出土遺物が非常に少なく、遺構の切り合い関係はほとんどない。そのため時期の判断が難しいが、周囲の遺跡の状況も考え合わせながら整理する。

1・2・4号溝状遺構とピット1は埋土が共通し、同時期に埋没したものである。文様をプリントした磁器小片が2号溝状遺構から出土しており、これらの遺構の時期は近代以降と判断できる。

ここで第24図を見ると、2次調査1号溝と1次調査3号溝状遺構がほぼ同一線上にあることがわかる。1次調査の際にも出土遺物がほとんどなく時期が特定できていないが、ほぼ同規模であり、同様の性格の溝であろう。ほ場整備前の区画に関係するのではないかと考えている。

2号溝状遺構は西側の深くなっている部分の幅、深さは1号溝と同規模であるが、溝の方向は異なる。また、本来もっと深い溝であったようであり、1号溝とは異なる性格のものであろうか。

先述の遺構埋土に見られる黒色土は調査区東壁土層(第28図第6層)にも見られ、1号土坑、3号溝状遺構=自然流路が完全に埋没した後堆積していることがわかる。1号土坑の埋土と3号溝状遺構上層の埋土は似通っており、最終的な埋没時期は非常に近いと思われる。両遺構からは遺物が出土しておらず、遺構の時期については近世以前としかいえない。

ピット2の埋土は暗褐色土で、土師器小片が10数点出土している。土質や色調から同一土器のごく近い部分の破片で厚みがあり、皿や碗ではない。埋土や出土遺物の状況が他の遺構と異なり、時期も異なると思われる。

さて、本遺跡の北に位置する西牟田大立遺跡では古墳時代と中世の遺構が検出されており、本遺跡においても両時代の遺構が存在する可能性が非常に高い。古墳が多く分布する丘陵に連なる微高地上にあり、古街道にも近い。4号溝状遺構出土の土師質編、植木抜き痕出土の同安窯系青磁碗の存在も中世の遺構の存在を示唆し、矛盾しない。このことを念頭におけば、1号土坑、3号溝状遺構が中世、ピット2が古墳時代と考えることができよう。

以上、遺構の先後関係を整理してみたが、時期については推測の域を出るものではなく、性格についても判然としない。今後の調査の進展により、西牟田地区の歴史が明らかになることを期待する。

註

1. 細田昭二・坂梨裕子1998『今市向野遺跡A・B地点』豊前市文化財調査報告書第16集 豊前市教育委員会
2. 徳永博文2005『志免縄文系遺跡』志免町文化財調査報告書第15集 志免町教育委員会

圖 版



1. 西牟田大立遺跡Ⅰ区全景（東から）



2. 同上 1号溝（西から）



2. 同左（北から）



1. 西牟田大立遺跡Ⅰ区
風倒木痕（東から）



2. 同上 噴砂土層断面
（南から）



3. 同上 地割れ跡（南から）

1. 西牟田大立遺跡Ⅱ・Ⅲ区
全景（南上空から）



2. 同上（上空から）



3. 西牟田大立遺跡Ⅱ区全景
（上空から）

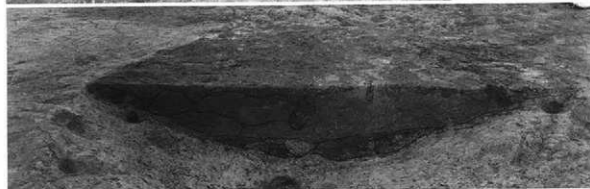


4. 同上 Ⅲ区全景（上空から）





1. 1号土坑 (南から)



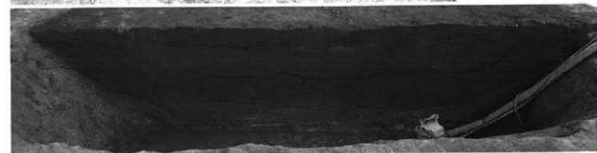
2. 同上 土層断面
(南から)



3. 2号土坑 (西から)

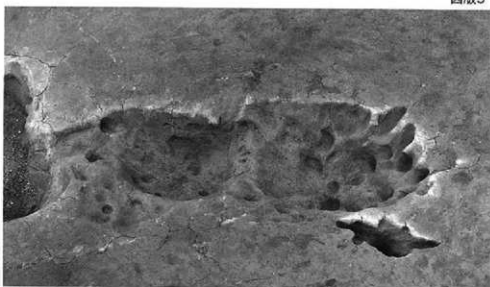
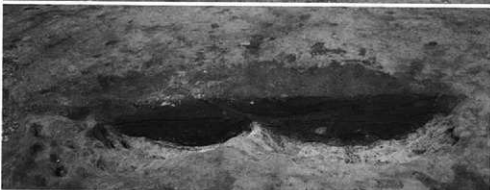


4. 3号土坑 (西から)



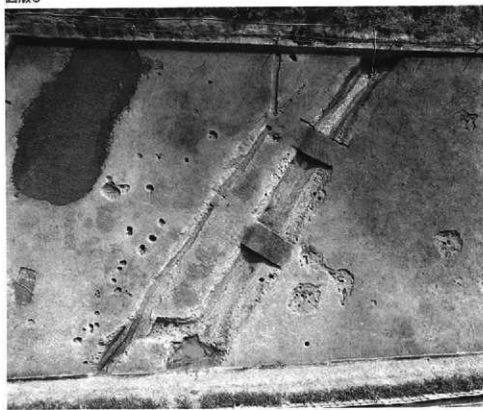
5. 同上 土層断面
(西から)

1. 4a・4b号土坑（南東から）

2. 同上 土層断面
（南東から）

3. 1号井戸（東から）

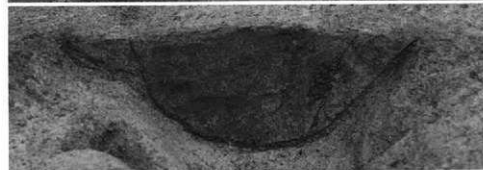
4. 1号井戸土層断面
（東から）



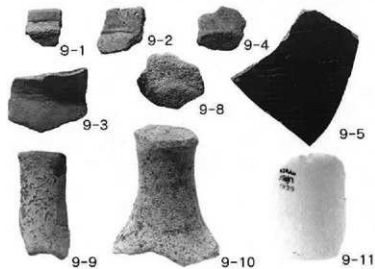
1. II区1~4号溝（上空から）



2. II区1号溝土層断面（北西から）



3. II区2~4号溝土層断面（北西から）



4. 西牟田大立遺跡出土遺物



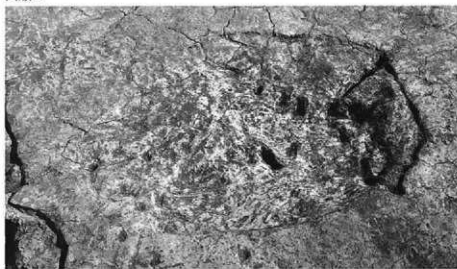
1. 西牟田北原遺跡全景（北上空から）



2. 同上（上空から）



3. 同上 I・II区全景（上空から）



1. 1号土坑 (南西から)



2. 2号土坑 (北西から)



3. 1号落し穴 (東から)



4. 2号落し穴 (西から)

1. 西牟田北原遺跡Ⅰ区
1号井戸（東から）



2. 同上 2号井戸（東から）



3. 西牟田北原遺跡Ⅱ区
3号井戸（北から）



4. 同上 遺物出土状態（北から）





1. 1号溝 (北西から)



2. 同上 土層断面 (北西から)



3. 2号溝土層断面 (南から)

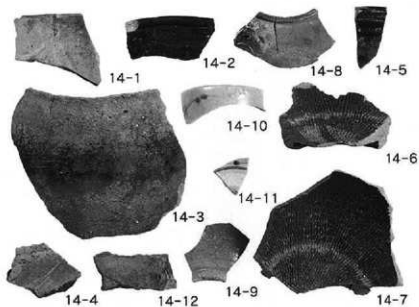


4. 4号溝土層断面 (西から)

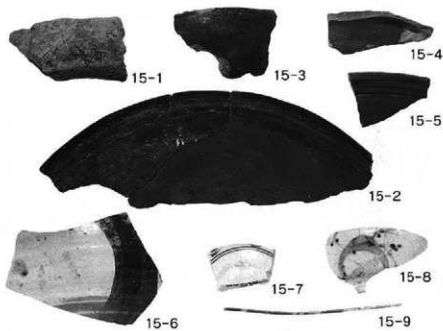


5. 風倒木痕土層断面 (南東から)

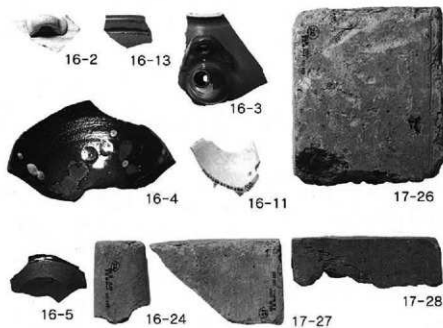
1. 西牟田北原遺跡1号井戸出土遺物



2. 同上 2号井戸出土遺物



2. 同上 3号井戸出土遺物





16-1



16-7



16-8



16-9



16-25



16-10



16-6



16-14



16-12



16-17



16-15



16-22



16-18



16-16



16-19



16-23

1. 西牟田平野遺跡(2次調査)
調査区全景(南から)

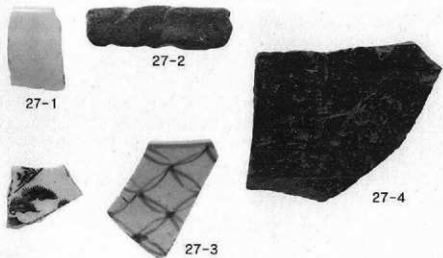


2. 1号土坑(東から)

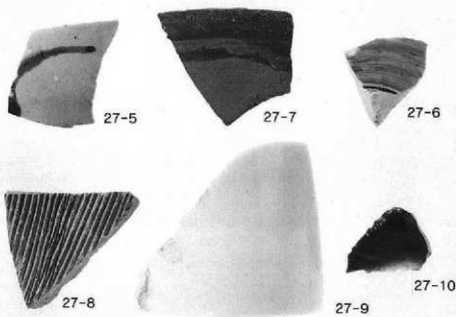


3. 3号溝状遺構土層(西から)

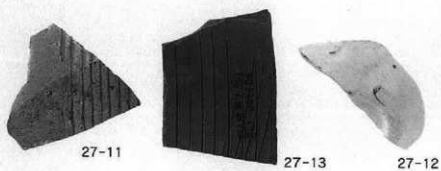




1. 西牟田平野遺跡(2次調査)
溝状遺構出土土器



2. 同上 支線遺構出土土器・石器



3. 同上 その他の出土遺物

報告書抄録

ふりがな	にしむたおおだていせき・にしむたきたはらいせき・にしむたひらのいせきにじょうき							
書名	西牟田大立遺跡・西牟田北原遺跡・西牟田平野遺跡（2次調査）							
副書名								
巻次								
シリーズ名	九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第5集							
編者名	秦 憲二・今井涼子							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〇〇'	〇〇'			
にしむたおおだていせき 西牟田大立遺跡	ふくおほたんとくまのし 福岡県久留米市 みやままちのまちにむかひ 三瀬町大字西牟 田字大立	40203	680073	33° 15' 4"	130° 30' 5"	2003.07.10 ～ 2003.09.30	2,000㎡	九州新幹線
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西牟田大立遺跡	集落	古墳 中世	土坑 5 井戸 1 溝状遺構 7	土師器 弥生土器 土師質土器 埴子 陶器				
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〇〇'	〇〇'			
にしむたあきたはらいせき 西牟田北原遺跡	ふくおほたんとくまのし 福岡県久留米市 みやままちのまちにむかひ 三瀬町大字西牟 田字北原	40203	680074	33° 15' 22"	130° 30' 7"	2003.10.1 ～ 2003.10.30	2,000㎡	九州新幹線
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西牟田北原遺跡	集落	縄文 江戸 明治	土坑 2 井戸 3 落し穴 2 溝状遺構 4	土師質土器 銅製品 陶器 ガラス製品 磁器 レンガ 土製品 瓦				
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〇〇'	〇〇'			
にしむたひらのいせきに 西牟田平野遺跡 にじゅうに 2次調査	ふくおほたんとくまのし 福岡県久留米市 みやままちのまちにむかひ 三瀬町大字西牟 田字平野	40203	680075	33° 15' 1"	130° 30' 4"	2004.10.12 ～ 2004.11.12	289㎡	九州新幹線
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西牟田平野遺跡 2次調査	集落	中世 古墳	土坑 2 溝状遺構 4	土師質土器 剥片石器 陶器 磁器 埴子				

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 211407
登録年度 17	登録番号 4

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第5集

**西牟田大立遺跡・西牟田北原遺跡
西牟田平野遺跡(2次調査)**

平成18年(2006年)3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号
印刷 株式会社川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番41号